

* 0045712000 *

3

0045712-000

特275-95

尋六の修身

岩瀬六郎・著

厚生閣

昭和10

AHF

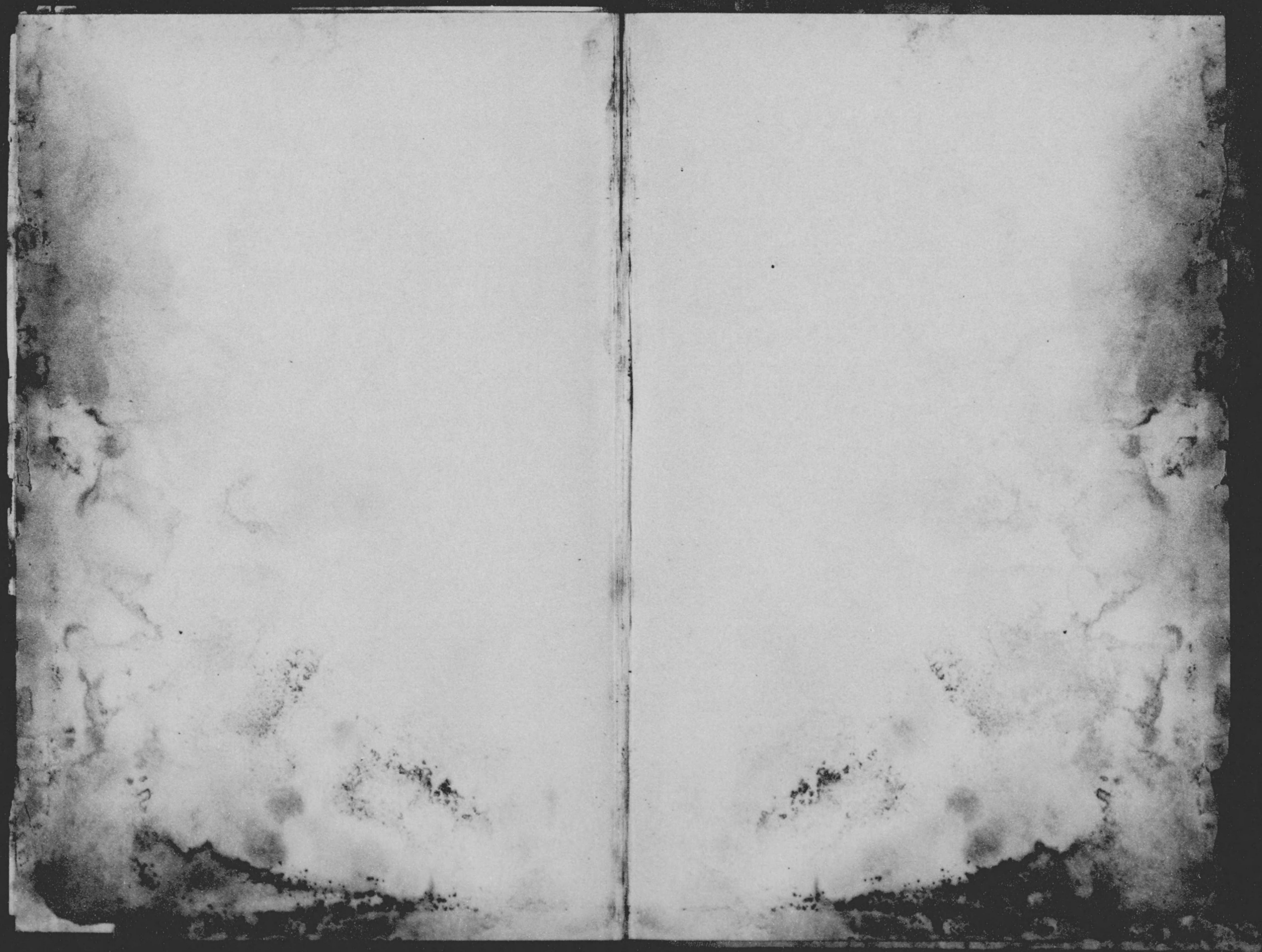
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

身修の六尋

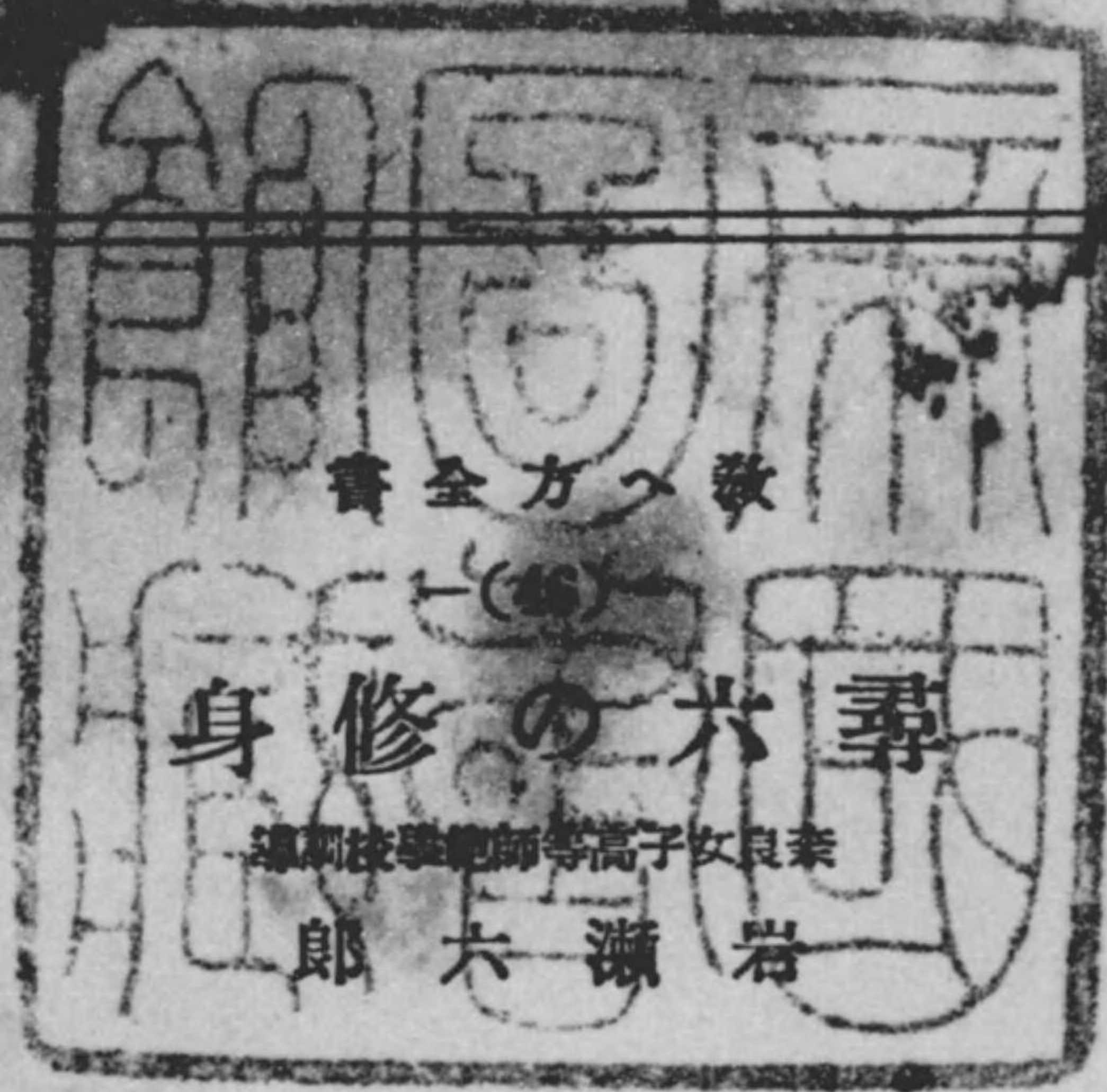
郎六瀬岩

刊閣生厚



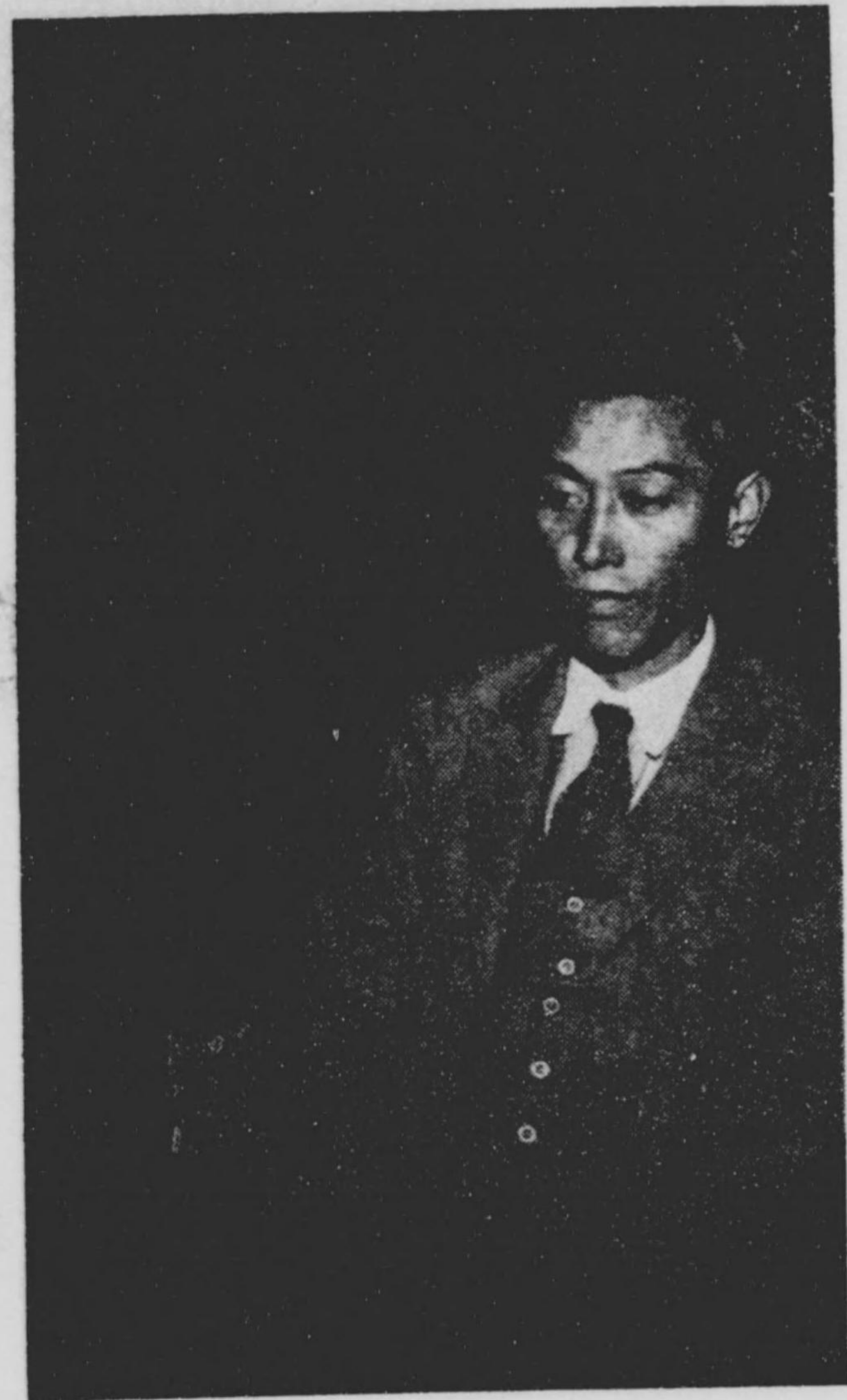


号275
95



厚生閣刊





影小者著

推薦の辭

東京高等師範學校教授
東京高等師範學校附屬小學校主事

佐々木秀一

教育殊に小學校教育は、極めて日常的な地道なものであつて、決して華やかなものではない。従つて教材と教育技術の研究とは、教育實際家にとつては最も重要性のあるものである。現代の教育界に教材研究の旺盛に行はれるのは、むしろ當然の現象である。然るに教材研究と云つても教育者が全然これを模倣し他人の教材教法の成果をその儘利用し、自ら研究し自ら創造する教育的熱意を失ふ結果を誘致するならば、却つて教育の實質的進運を阻害するに至るものである。然して現代に於ける教材及び教法の研究には、さうした危険性が多分にある。

勿論、教育家が徒に高遠なる理論にのみ走つて、實踐教育の大道を忘れる

三 標準考查問題…………… 101

1 第一學期の考查問題…………… 101

2 第二學期の考查問題…………… 103

3 第三學期の考查問題…………… 104

第六章 各學期の指導要領

二 社會生活教材の指導過程…………… 75

三 國家生活教材の指導過程…………… 82

一 各學期の指導方針…………… 89

1 第一學期の指導方針…………… 89

2 第二學期の指導方針…………… 92

3 第三學期の指導方針…………… 92

二 各學期の指導要目…………… 95

1 第一學期の指導要目…………… 95

2 第二學期の指導要目…………… 97

3 第三學期の指導要目…………… 99

第一章 一般修身教育の根本方針

尋六の修身教育を説くに當つて、先づ一般修身教育の根本方針ともいふべきものについて説いておかうと思ふ。その根柢があつて始めて尋六の修身教育の方針も確立するわけであるから。但し、ここにその詳細を盡すことは出来ないから、只その要點を記すだけに止める。稍詳細なる論は、本全書中尋五の卷に載せておいたからそれを参考せられたい。

一 全一生活に立脚すべきこと

何といつても、修身教育は生活に立脚せねばならぬ。児童の内的外的兩方面の生活に立脚して之を指導し、之を道徳的に向上發展せしめ、以て道徳的人格を陶冶するのが修身教育である。

児童の内的生活とは何か、それは内面的精神生活である。

児童の外的生活とは何か、それは外面的行動の生活である。

しかし、この内的生活と外的生活とは、切り離されたる別々のものではなくて、實は同一

の生活を見る面の相違にすぎないものである。内面の精神的活動があつて之が外面の行動となつてあらはれるものであり、外面の行動の生活のあるところ、必ずその根柢として内面の精神生活があらねばならぬ。

尤も、内面の精神があつても、未だ必ずしもそれが外面行動となつてあらはれぬ場合も考へられるであらう。又、外面の行動があつてもそれが必ずしも内面の精神を根柢とせず、單なる習慣性若しくは衝動に基く行動でしかない場合も考へられるであらう。しかし乍ら、さうした單なる内面的精神だけ、又、外面的行動だけの指導は、修身教育の目的とするところでもなければ、方法として當を得たるものでもない。

修身教育としては、必ず、それが發して外面的生活活動となり得るやうな内面的精神を養はねばならぬ。又、必ず、それが内面的精神生活を根柢として外に發したものであるところの外面的行動を指導せねばならぬ。修身教育が、單なる内面的精神だけの教養や單なる習慣的行動や衝動的行動の反覆だけに終つてしまつては、その趣意は頗る不徹底であるといはねばならぬ。

主知主義の修身や主情主義の教育は、唯、内面的精神だけの教育に終つて、それが外面的活動にまであらはれる力を養ふことが出来なかつた。内に充分なる道德的知識をもち道德的感情を豊に包藏しながら実行力の之に伴はないやうな教育に墮してしまつてゐた。これでは眞の道德的人格が陶冶されたとはいへない。

主意主義といはれる訓練主義・實踐主義の修身の中には、内面的精神の教養を忘れて、單に外的身體的の行動を習慣づけ、或は衝動的行動を敢へてせしめようとするが如きものがある。かく外的行爲の指導のみに着眼して内面的精神の教養が不足してゐるやうな修身は、畢竟無意味であるのみならず、屢々恐るべき結果を將來する。

修身教育は内面的精神と外的行動との綜合一體なる姿に於ける全一生活の指導であらねばならないのである。

二 知情意圓滿の道德的人格を陶冶すること

修身教育は、知に偏してもならず、又情に偏しても意に偏してもならぬ。しかし、國家の組織や社會環境の複雑なる今日に於ては、固より道德的知見の指導を頗る重んずべき理由があり、又、情や意の陶冶も固より之を大に尊重せねばならぬ。要は、その知情意を指導する方法如何、又、所謂道德的人格の見方如何に問題があるのである。

道德的品性が、知情意の圓滿なる作用とその道德的傾向とを意味することは明であるが、その所謂知情意の圓滿の陶冶を知と情と意との別々の陶冶の集積であるといふやうに見てはならぬ。知情意は常に渾然として一體をなしてゐる。しかして人格は統一である。その渾然一體をなせる知情意が如何に統一せられてあるかといふ、統一の姿に従つて様々の人格が成立つのである。知情意が科學的の知によつて統一された姿にある時、それは、科學的人格である。知情意が美的感情によつて統一せられた姿にある時、それは藝術的人格である。しかして、道德的人格とは、知情意が道德的意志によつて統一された姿である。道德の對象となる生活は、意志する生活である。同じ生活でも、之を知識する面から見た場合や感情する面から見た場合は、道德の埒外にある生活である。人格を、意志による統一の面から見た場合

に始めてそれが道德的なりや否やの問題の對象となるのである。道德の對象は行爲である。行爲は概念的には内的と外的との區別が立てられるが、それは何れも意志の活動である。

知情意圓滿の道德的人格とは、知情意が道德的意志によつて統一せられたる人格である。道德的知識が單なる知識としてはたらいてゐる場合は道德的人格を意味しない。道德的感情に於ても同様である。意志の要素としての知識及び感情が、悉く道德的にはたらいて道德的意志の姿に統一せられたる人格を道德的人格といふのである。知情意圓滿の道德的人格とはかくの如く、道德的意志の要素としての道德的知識や道德的感情が正しく強く豊にはたらくところの人格である。

かくの如き知情意圓滿の道德的人格を陶冶するには、直接に道德的意志の生活を指導するより外にない。知識と感情と意志とを別々に切り離して之を別々に指導し陶冶しようとしてはならない。

徳性の涵養と實踐の指導との二つを、對立する別々のものと考へてはならぬ。徳性とは知情意圓滿の道德的意志によつて統一せられたる人格性であり、内的精神的なるものであるが

それは已に意志的統一體であるから、必然に外的行動として發現すべきものである。又、道德の實踐は、内なる道德的意志の統一が外にあらはれたものであるから、必然に内なる道德的品性を豫想するものである。内なる道德的品性なくして道德の實踐のあり得る理由はない。道德の實踐は單なる衝動的行動や習慣的運動ではないからである。

三 修身訓練一體のこと

訓練とは、生活を一定の方向に向つて傾向づけ且つ力を強めることである。しかして道德的訓練とは、生活を道德的に傾向づけることである。訓練の手段としては、普通に、命令や禁止や賞罰等による實行の督勵とそれによる器械的習慣づけとが考へられてゐるが、單に生活の外面的行動のみが習慣づけられても内面的な精神が知情意圓滿なる道德性として傾向づけられない限り、單なる外的の習慣づけは無意味である。故に訓練に於ても、當然内面の道德性の陶冶が豫想せられねばならぬ。内面の精神を動かして自發的に道德を實踐せしめ、そ

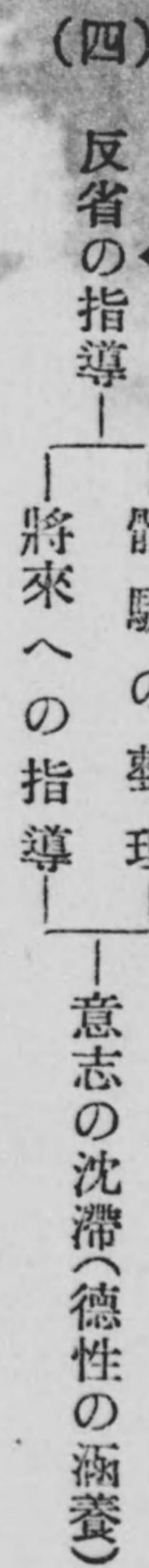
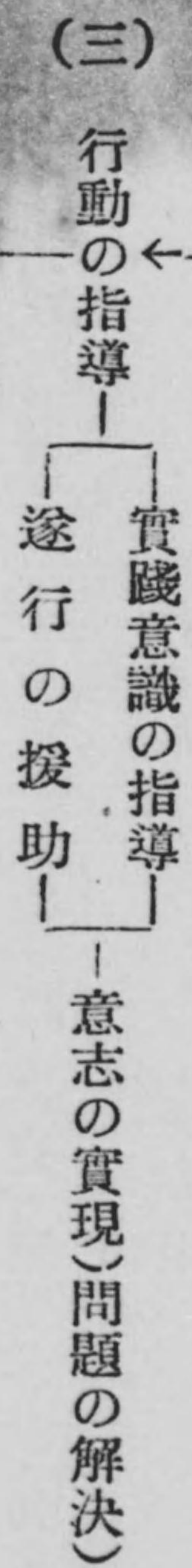
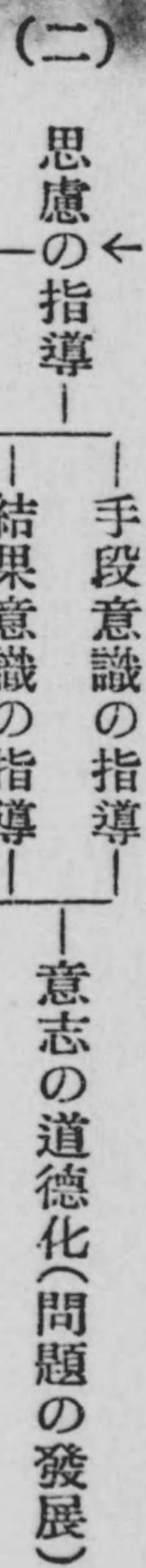
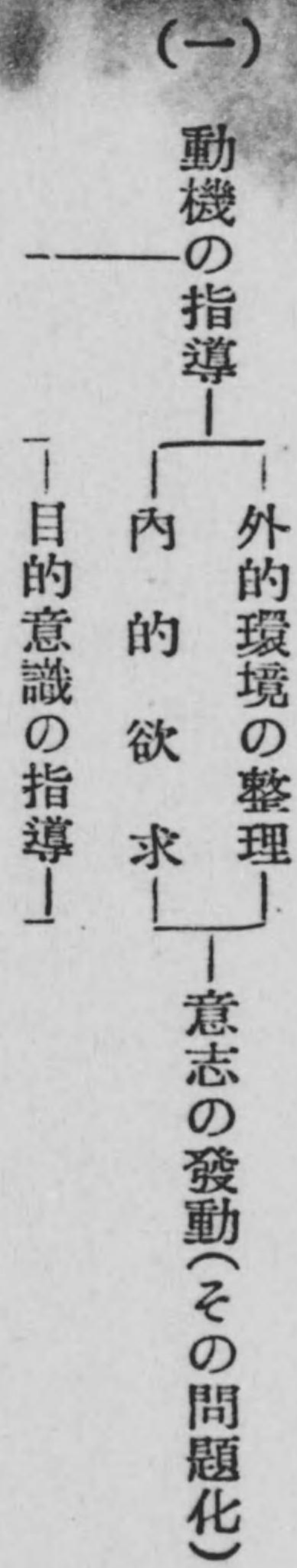
の精神の道德的傾向とその實踐の力とを同時に養ふものが眞の訓練であらねばならぬ。しかして修身とは内なる道德性を養ふと同時に、外なるその實現即ち道德の實踐を指導するものである。

かく考へると、修身と訓練とはもと一體であつて、その間に何らの區別を設け得べきものではなく、又、何らの區別をも考へ得べきものではない。修身とは内なる精神を陶冶して外に及ぼすものであり、訓練とは外なる道德の實踐を習慣づけて内に及ぼすものであるといふやうな常識論は最早徹廢せられねばならぬ。内なる精神を養ふことなくして行ふ單なる器械的習慣づけと、外なる實現を伴はしめることなくして行ふ單なる精神の教養とは、もともと別個のものであつて、兩者の融合は不可能である。意志としての精神の指導はこれを外より見れば實踐の指導であり、外なる道德實踐の指導は同時に内なる道德的精神の教養であらねばならぬ。修身と訓練とは全く同一一體の教育作用であらねばならぬ。

四 修身訓練の一般指導過程

以上の如き修身訓練一體觀に立つ道德教育は、兒童の全一生活に立脚して之を道德的に向上せしめ、内に徳性を涵養すると同時に、外に道德の實踐を指導するものである。その指導過程は、當然渾然一體の知情意が意志によつて統一せられる姿に即して立てられねばならぬ故に修身訓練の一般指導過程は、意志の過程に則つたものでなければならぬ。

意志の過程は極めて複雑多様であるから修身訓練の指導過程も極めて複雑多様である。けれども今便宜上、その標準ともなるべき一般指導過程を規定して見ると、大凡そ次のやうなものが得られる。



右は固より一般指導過程であるから、複雑なる實際生活の指導は、必ずしも此の規範通りに單純に拘子定規的に遂行されるといふわけではないが、大體かくの如き過程に従ふ指導によつて完全なる道德的意志の陶冶——道德的意志の姿に統一せられたる知情志の圓滿なる陶冶が可能であるといひ得る。

尙、右の指導過程に關して注意すべきことがらは次の諸點である。

(1) これは、修身訓練一體觀に於ける修身訓練の過程であつて、一修身時間内の一教材

の取扱の過程ではない。

(2) 一教材の取扱を主とする所謂修身教授は、右の過程即ち、訓練の過程の中の何れかに於て行はるべきものである。

(3) 動機の指導は外的環境の整理及び、發動せる内的欲求を問題化することをその主たる任務とする。所謂修身教授の教材は、重要な環境として道徳的欲求の發動を促す意味に於て、動機の指導中にその取扱を價值づけられることが屢々ある。

(4) 思慮の指導は、意志の道徳化を以てその主要なる任務とする。故にここに於て、意志の要素たる知識・感情及び欲求を道徳化することに力を注がねばならぬ。然して道徳的な決意に到達せしめねばならぬ。此の指導の爲に、所謂修身教材を必要とするところが頗る多い。

(5) 行動の指導は、道徳化せられたる意志の實現の指導である。それを援助する意味に於て、所謂修身教材を用ふるの必要を生ずることが屢々ある。

(6) 反省の指導は道徳的意志の沈滞である。即ち徳性はこれによつて形成せられ、次の機會に於ける外的實現を待機せしめられる。それを深める意味に於て、所謂修身教材の活用せられることは頗る多い。反省は自己の過去の意志過程の再現とその道徳的吟味であるが、その吟味の規準、資格として修身教材が有力なる役割を演ずることは當然である。

五 環境を重視すること

動機は外的なる生活環境と内的なる欲求との接觸によつて發現する。茲に、生活に立脚する修身教育が環境を重んずべき第一の理由がある。よき動機はよき環境によつて觸發せられるものであるからである。

生活の一般環境としては、國家・社會・家庭・學校等に於ける一切の事物事象、就中それらの人的要素の人格に着眼することが極めて大切である。學校に於ける教師の人格・學校學級の氣分・兒童相互の人格などに關して環境整理をなさねばならぬ。

修身時間及び修身教材としての例話訓辭も亦環境と見ることが出来る。例話訓辭の提供が子供の道德欲求を發動せしめる力は大きい。此の環境の意味に於て、修身時間に例話や訓辭を取扱ふことは所謂修身教授をして有効確實ならしめるものである。かくの如き意味に於て例話訓辭を取扱ふ修身教育は、その修身時間のみで教授が完うしたと考へてはならぬ。それは單に道德的動機を起さしめたものに止まるものであるから、之に引續いて、その動機に對する思慮・行動・反省の指導過程が展開せられねばならぬ。その指導の爲に、特定の修身時間を用ふると否とは別問題としても、兎も角も、その後に行ふべき道德教育の多くの過程を所有するものであることを忘れてはならない。

環境なしには生活は考へられぬ。環境なしには道德教育は考へられぬ。生活に立脚する修身教育は常にその生活環境に注意して、如何なる環境から如何なる欲求が發動し、如何なる意志活動が生起するかを注意し、豫め、生活環境に即して教材の活用を豫定するところがあらねばならぬ。

生活に對する環境の影響は、ひとり欲求の發動に關してのみでなく、思慮にも、行動にも

反省にも環境の影響するところは大きい。これらすべての場合に於ける環境の整理利用を忘れては生活に立脚する修身教育の意味はなくその実績はあがらない。さうした環境の意味に於ける修身教材の使用、教師の人格の感化などは、どの過程の指導にも常に之に深甚の考慮を拂はねばならぬ。只、如何なる教材は如何なる機會に用ふるのが最も適切有効であるかを實際について充分研究すべきである。

5 教育目的を具體的に明瞭にすること。

修身教育の目標を立てるのに、徳性涵養及び實踐指導といふ形式方面のみを考へたのでは満足出来ない。如何なる徳性を涵養し、如何なる實踐を指導するかといふ具體的實質的内容を明にせねばならぬ。ここに着眼して、教育の規ひどころをはつきりさせてゐるのが現代修身教育の大きな動向であり、又、それは極めて大切なことであるといはねばならぬ。

修身教育の目的は、健全有爲なる日本國民を養ふことにあらねばならぬ。教育に關する勅語の御旨趣に適ふところの、國民道德を體得し、之を日々の生活に於て實現し以て天壤無窮の皇運を扶翼し、我が日本の國運をして愈々隆昌ならしめるに足るところの創造的活動的道

徳的人格を養ふことにあらねばならぬ。單に、沈香もたかす屁もへらぬ式の無爲なる善人を養ふことであつてはならぬ。兒童をして、はつきりとした國體觀念をもたしめ、日本精神に充ち溢れしめ、以て民族の大理想を世界に向つて堂々實現し得るの人格を作り上げることであらねばならぬ。

今日の日本を毒してゐるものは、個人主義的思想と物質主義的思想であり、之が根柢となつて或は享樂主義・功利主義・立身出世主義となり、浮華・柔弱・輕兆詭激の思想若くは行動となる。全體主義・精神主義の道徳によつて質實剛健・穩和公正・共同團結の精神と生活態度とを養ふことこそ刻下の急務である。しかし、それが日本精神の眞髓であり我が國體の根柢たる共同社會精神である。これをはきちがへて所謂右傾やファッショや民族的利己心の教育に陥らしめてもならぬ。

第二章 尋六修身學習指導の根本方針

尋六修身指導の根本方針は、一般修身教育の根本方針を尋六といふ學年に特殊化したもので次のやうな諸點があげられる。

一 道德的精神内容の深化

内的精神と外的行動とは、道德生活の内面と外面とに過ぎないもので、両者が一體のものであることは已に一般修身の根本方針に於て説いたところであるが、それを尋六といふ學年について考へて見ると、下學年兒童とは大に趣を異にしてゐる點がある。

下學年兒童にあつては、その外的實踐に對する精神内容は極めて單純且つ淺薄なるものである。尋二兒童の工夫は、唯、工夫の興味と、工夫がよいことであるとの漠然たる意識によつて、それに何の疑を抱くこともなく直ちに行動となつてあらはれ、その間に何らの問題も起さない。それで充分満足が出来るのである。けれども、尋六の兒童にあつては、必ずしもさうはいかない。「何故に工夫はよいことであるか」「工夫することに、如何なる人間生活と

しての意味があるか」「如何なる工夫が最も價值深いものであるか」等のことを問題として有り、その問題が解決せられなければ、工夫の生活の満足感には得られない。尋六としては、その程度まで児童の道徳心を發達させて行かねばならない。深き理解と深き感激とから發現した行動でなければ、道徳的に意義あるものとはいはれないからである。外的の表現即ち實行は同じであつても、その行動の根柢たる精神内容をして道徳的により深いものであらしめること、これが上學年の児童の指導としては必要である。又、児童の發達した心意は、必ず之を要求して止まないものである。

この如き上學年児童の修身指導は下學年児童のそれと大に趣を異にすべきものであるが、これは必ずしも尋六といふ學年に限つたことではない。尋四でも尋五でも、それぞれその發達程度に応じて皆さうであるべきであるが、尋六が義務教育の完成期にあることを思ふ時、此の意味での道徳的生活態度を、能ふ限り深く訓練することの必要を痛感せしめらる。

此の故に、尋六の修身訓練では、その道徳實踐を指導すると同時に特に道徳的精神内容を

深め廣めることに力を入れねばならないのである。尋六の修身教育が、かくの如く、道徳的精神内容の深化に重きをおくべきことは自明である。

二 男女の特性に應ずること

尋六といふ學年が、義務教育の完成期であつて、これを最後として児童を社會に送り出すものであることを考へると、男女の特性に應じての適切なる道徳的精神内容及びその外的實踐の指導に重きをおかねばならぬことも亦自ら明である。

義務教育は、國民教育の基礎を養ふものであるから、男女の性を分たずして、同じく國民としての共通な道徳的陶冶をなすべき領域の廣いことはいふまでもないことである。しかし乍ら、その同じ國民としての精神を根柢としながら、男子と女子との具體的實踐の道は大に趣を異にするところがあるべき筈である。男子のなすべき忠は、非常時にあつては、戰場に出でて勇戦奮闘することであるのに對して、女子のなすべき忠は銃後にあつて之を支援し激

勵し、戰士をして後顧の憂なからしめることであるといふが如く、又、一家に於ての男子の任務は外に出て働くことであるのに對して女子の任務は家庭にあつて家事を齊へ子女を養育し家庭に和樂を與へることであるといふが如きである。

故に、その道徳的精神の教養は男女共に同じであり乍ら、その具體的實踐の道の指導は、男女によつて大に趣を異にするところがあつて然るべきである。尋六の修身指導としては、茲に着眼することが大に必要である。

三 自律的修養の訓練

道徳律、及び、之が實生活への實現に關して、國民教育として指導すべきことは殆ど枚擧に遑がない程多種多様であつて、その悉くを指導しつくすことは到底不可能である。小學校の義務教育は、それら多くの道徳律及びその實踐の道の根柢をしつかり養つておくものであるといふより外はない。

教育が、教へただけのことをそのまま行はしめるにすぎなく、自ら修養し自ら道徳生活を高めて行くの力を養ふことが出来ぬものとすれば、教育の價値は甚だ貧弱である。小學校で養つた道徳的知識と道徳的判斷力と道徳的感情と道徳的意志とを基礎として、將來益々道徳的修養を深め、實社會に順應し且つ之に適應すべき道徳を創造して行くの力と態度とを訓練することは、何といつても義務教育の大きな任務である。義務教育の完成期たる尋六の修身教育に於て、この點に特に力を入れるべきことは自ら明であり、且つ兒童の發達程度の上から見て、尋六はその可能性をもつこと充分である。

四 社會的生活の指導

社會的生活の指導訓練は、學年の高下を問はず、何れの場合といへども必要ではあるが、尋六に於ては別して此の方面に重きをおくことが大切である。子供たちの中には上級學校に進むものもあるが、又このまま實社會に出るものも少くない。義務教育の完了のためには、

社會生活の指導も、その基礎的工作だけは完了であらねばならぬ。

社會的生活の指導には形式方面と實質方面との兩方がある。形式方面とは、態度の指導である。社會の一員として、社會的共同のために、消極的には之に順應し社會に迷惑を及ぼすやうのこともなき態度、積極的には進んで社會の爲に貢献し社會文化を進め社會の福利を増進し社會の發展を促して行くやうな奉仕的獻身的態度の指導である。

實質方面とは、實社會を理解し體驗し、その生活を實地に於て道德的ならしめることである。實社會の組織・産業・經濟・職業・風俗・習慣等の實相に觸れさせ、その實社會に於ける具體的道德生活の道を學ばすことである。

形式方面の指導は、必ずしも子供を實社會にふれさせなくても出来る。學校・學級といふ特殊の社會生活に於て、その生活態度を指導することが出来る。だから、此の方面の指導は必ずしも尋六といふ學年を俟たないで道德教育と共に常に行はれて居らねばならない。

實質方面と雖、子供は全然實社會から隔離された生活して居るわけではないから、常に此の方面の指導に注意が拂はれて居らねばならぬわけではあるが、兒童の發達の程度の低い下

學年にあつては、子供自ら實社會に關心を有つことも少く、且つこれを理解する力も乏しい。様々の矛盾に充ちた實社會に餘りに深くふれさせることはむしろ避けねばならぬやうな點も少くない。けれども子供が漸く長じて尋常五六年時代に至れば、子供自らも次第に社會に關心を有つことが多くなり、且つ之を理解し社會の矛盾に對しても多少は之を批判し得るの力をも備へて来る。此の時に當つて、兒童を指導し、實社會への關心を一層深め、その理解認識を正し、道德的判斷の力を練ることは可能でもあり必要でもある。特に、間もなく兒童を社會に送り出さうとする尋六の修身に於てはその必要を痛感せられる。尋四以下が小學校に於ける此の方面の指導の準備期とすれば、尋五はその初步指導期で、尋六はその發展期且つ完成期であるといへる。

態度の指導は、その純粹なる形式的意味に於ては、毫も實社會にふれることなくしても可能であるといひ得る。しかし、本當の陶冶は個々具體にふれなければ出来ないものである。萬能的な形式陶冶論を信奉するものにあらざる限り、實社會に於ける生活態度の指導は實社會に於ける生活體驗を通してのみ可能であるといふことが肯定され得よう。かういふ點から考

へて、尋六こそ形式的態度と實質的内容との両面の、眞の社會生活指導をなすべき學年であるといへる。

實社會の生活には、必ずしも道德と一致せざる處世術といふものがある。その處世術と道德との矛盾に苦しむのは、ひとり、學校出たての人間ばかりには限らないが、特に義務教育を終へたばかりの子供たちが一度實社會に乗り出したとき、様々の社會の裏面にふれ、その惡世相に直面して、此の問題になやみ、自ら之に善處することが出来なくて外道に陥るものは決して少くない。處世術と道德律とは元來一致すべきものであり、一致せしむべきものであるが、現在のところでは未だそこまでは進んでゐない。此の處世術と道德律との矛盾に關する問題を取扱ひ、道德的處世の道を指導することも尋六としては可なりに必要な仕事であり此の點が尋六修身教育の重要方針たるべきことは明である。

五 國家的道德の徹底

尋六修身書の教材には所謂國家的教材が頗る多く、殆どその大半否全般を占めてゐるといつても差支ない。尋六の修身が、國家的道德の指導を眼目としこれを以て重要方針たらしむべきことは、教科書の教材を見ただけでも充分に明である。

國家的道德の指導を、假りに分析すれば第一は國家觀念の養成である。第二は愛國心の養成である。第三は國民道德の道德律を明にすることである。第四はその實踐力を強め深めることである。國家の要求する義務教育を完成すべき尋六の教育に於ては、當然これらの諸方面の指導を完成するの覺悟がなければならぬ。

國家的道德の指導は勿論已に尋一より初まり、學年の進むに従つて次第にその量をまし程度を高め意味を深めて來てゐる。尋六に於て突如としてその指導が始まつたといふのでもなければ、尋五以下に於ては之を輕んじてよいといふわけでもない。此の間に立つて、國家道德の指導としての尋六の立場は奈邊にあるかといへば、要するに、尋五までの指導の總括であり、その趣旨の徹底であり、小學校としての此の指導の完成である。ここに尋六修身教育の最も根本的なる大方針が立てられねばならぬ。

六 國家的道德へ歸着せしめる

以上述べた如く、尋六修身教育の方針として、私は

道德的精神内容の深化

男女の特性に應じての實踐指導

自律的修養態度の訓練

社會的生活の指導

國家的道德の徹底完成

の五つをあげたが、實はこれらは對立並立させられる別箇の概念ではない。いふところの道德的精神内容とは、個人的生活としての道德、家庭生活としての道德、學校學級等の生活としての道德、社會生活としての道德、國家生活としての道德等の精神内容を意味し、形式的には誠・愛・敬・信・等の精神内容を意味するが、その精神内容を深化すればそれはすべて

國家的道德に歸着する。個人生活は國家の一員としての個人生活であつて、任意の一人としての個人主義的な個人生活ではない。家庭生活も國家の要素としての家庭生活であつて、國家とはなれたる單獨の家庭生活ではない。日本といふ國家は、大家族主義の一大共同社會を根柢として成立つ國家であつて、その社會組織の單位は家である。我が國民道德に於て忠孝一本なる所以も亦ここに存する。家庭生活に於ける孝行・友愛・崇祖・夫婦の和等の道德は、家庭道德であると同時に國民道德であり國家道德である。

男女の特性に應じた實踐の指導は、男女によつて國民たることに變りがあるといふことを意味するものではない。國民としての道德、君國に對する忠君愛國の精神に於ては男も女も全く同様であるが、只男女の特性に應じて、自らその實踐の上に各々任とするところがあるといふのである。究極するところ、男女各々その特性を發揮して國家道德を實現すべしといふのである。

自律的修養の態度といふ言葉の限りに於ては固より何らの道德内容を含まない。しかし實際に於て、何らの内容をも含まない態度の指導は出來ない。しかして、その含ましむべき道

徳内容はいふまでもなく國家的道德である。今日、日本精神とか日本的といふ言葉が社會的に強く叫ばれてゐるが、かうした國家的精神のあふれた社會環境の中にあつて自律的に國家的道德的人格を修養してねり上げて行くその修養態度を養ふのが尋六修身の一方針でなければならぬといふのである。

社會的生活態度といふも亦右と同じである。社會生活は、個人主義的の個人に於ては、社會を以て個人の方便と見、その立場ですべての社會生活を律して行く。けれども國家的道德の立場に於ては、社會は個人の方便ではなく、各國民のよりよき社會生活態度が國家をして益々隆盛に赴かしめるといふ考のもとに自己の社會生活を律して行く。社會生活の指導といふことの眞意も亦、かくの如く、國家を目的とし國家的道德の社會的實現の指導といふ意味のものである。

日本の國家の基礎根柢をなすものは、一大家族主義的な共同社會である。故に、社會生活の指導は、此の共同社會的生活の指導でなければならぬ。人々が自然の情によつて益々固く強く結ばれて行くやうに、又その自然の情に基く道德によつて、社會がその秩序を保ち統制

をとつて行くやうに、しかも、その共同社會をして益々文化的發展をとげしめて行くやうに、科學・藝術・宗教等の生活をして道德的ならしめて行くやうな各個人の社會生活態度を指導する。ここに尋六修身の社會生活指導の眼目があるので、これは畢竟國家的道德の指導を意味するものである。

七 教育勅語の御言葉に歸結せしめる

日本の國民道德の内容は、悉く、教育に關する勅語の中に網羅されてゐる。小學校の修身教育は、すべて此の勅語の御趣意に基づくものであることはいふまでもない。

尋六の教科書の教材の中には、特に「教育に關する勅語」なる課が連続して設けられ、以て尋常小學校六箇年の修身教育を茲でまとめらるやうになつてゐる。此の課の取扱に就ては後に説くが、兎も角も、それは教育勅語を單獨に獨立自全のものとして新に茲で教へるのではなくて、今までの修身を茲でまとめ、一切の道德を教育勅語に歸結せしめるといふ意味のも

のである。故に、尋六の修身に於て、教育勅語の御趣意をよく奉體せしめることは、即ち、一切の既習の道徳を教育勅語の御精神に歸結せしめ、教育勅語のお言葉に結びつけるといふことである。

尋六としては、單に「教育に關する勅語」の課に於てのみならず、すべての課に於てその徳目内容を教育勅語に歸結せしめるやうに注意することを忘れてはならぬ。尋六修身の方針として此の點を重んずべきことはいふまでもないことである。

第三章 尋六修身教材の全體的的研究

尋六修身教材の特質及び組織を全體とし把握する爲に、之を縦觀的及び横觀的の二方面より研究しよう。

一 尋六教材の縦觀的研究

尋六修身教材の縦觀的研究は、單に尋六の部分だけを見たのでははつきりしない。故に尋常小學校全學年の課税（教科書）から之をながめ尋六の位置と特色とを捉へて見よう。但しその爲には、先づ教材を若干分類して比較考察することが必要であるが、元來この分類といふことは、そんなに嚴密な意味ですることは不可能で、確然と對立する標準を立てることが困難な上に一つの教材があつた部類にも此の部類にも入るといふことは屢々ある。よつて茲にはその主なる所に従つての大體の分類を示すに留めておく。

尋一の教材

A 生活境遇別に見て

尋二の教材

A 生活境遇別に見て

個人生活に関するもの……………ジブンノコトハジブンデ以下 六
 家庭生活に関するもの……………カウカウ 以下 五

B 生活の現在と将来との別より見て

現在生活を主とするもの……………ガツカウ 以下 二五
 将来生活を主とするもの……………チュウギ 以下 二

個人生活に関するもの……………ゲンキヨク以下 五
 家庭生活に関するもの……………ワタクシノウチ以下 五
 学校生活に関するもの……………ガツカウ 以下 五
 社会生活に関するもの……………アヤマチヲカクスナ 以下 七
 国家生活に関するもの……………テンチャウセツ 以下 二
 総合的なもの……………ナツヤスミ 以下 三

尋三の教材

A 生活境遇別に見て

個人生活に関するもの……………健康 以下 六
 家庭生活に関するもの……………孝行 一
 学校生活に関するもの……………師をうやまへ 以下 三
 社会生活に関するもの……………規則に従へ 以下 一二

B 生活の現在と将来との別より見て

現在生活を主とするもの……………二年生 以下 二二
 将来生活を主とするもの……………チュウギ 以下 五

学校生活に関するもの……………二年生 以下 二

社会生活に関するもの……………キソクニシタガヘ 以下 八

国家生活に関するもの……………テンノウヘイカ 以下 三

総合的なもの……………ウヂガミサマ 以下 三

國家生活に關するもの……………皇后陛下 以下 五

B 生活の現在と將來別に見て

現在生活に關するもの……………整頓 以下 一六

將來生活に關するもの……………忠君愛國 以下 一一

尋四の教材

A 生活境遇別に見て

個人生活に關するもの……………志を立てよ 以下 一〇

家庭生活に關するもの……………孝行 以下 二

社會生活に關するもの……………禮儀 以下 七

國家生活に關するもの……………明治天皇 以下 八

B 生活の現在及び將來別に見て

現在生活に關するもの……………禮儀 以下 五

將來生活に關するもの……………自立自營 以下 二二

尋五の教材

A 生活の境遇別より見て

個人生活に關するもの……………儉約 以下 六

家庭生活に關するもの……………孝行 以下 三

社會生活に關するもの……………公益 以下 一二

國家生活に關するもの……………我が國 以下 八

B 生活の現在及將來の別より見て

現在生活に關するもの……………勉學 以下 三

將來生活に關するもの……………公民の務 以下 二四

尋六の教材

A 生活の境遇別より見て

個人生活に關するもの……………自立自營 以下 五

家庭生活に關するもの……………祖先と家 以下 二

社會生活に關するもの……………公益 以下 五

國家生活に關するもの……………皇大神宮 以下 一三

綜合的なるもの……………良心 以下 二

B 生活の現在及び將來別より見て

現在生活を主とするもの 例話内容及び其取扱方より見て殆ど現在生活を主とする見
將來生活を主とするもの べきものがない。

生活の境遇別に教材を分類して見ると、右の表によつて明なる如く、

(イ) 下學年には、學校生活に關するものが相當にあるが、學年の進むに従つて、此の種の教材は全然なくなる。

(ロ) 社會生活に關するものは下學年にもあるけれども、學年の進むに従つて次第に多く尋五に於て最も多い。

(ハ) 國家生活に關するものは、學年の進むに従つて次第に多く尋六に於て最も多い。といふことがわかる。

社會生活に關するものが尋五に多く尋六に少いのは、尋六の社會生活指導が軽く見られてゐる爲ではなくて、殆ど全部を國家教材によつて埋めた爲に社會教材をより多く盛ることが出来ないのである。しかも、社會教材と國家教材とを判然と區別する立場に立つて之を眺めるのは實は不適當であつて、所謂國家社會教材として之を一括し、尋六に於ては、國家社會教材が斷然多いといふのがむしろ當を得た見方であるともいへる。少くとも、尋六の社會教材を取扱ふに當つては、その教材を國家的道德の立場から意味づけことが極めて大切であらう。

尙、尋六教材の特質は、右の如き數量的比較のみではどうしてもはつきりしない部分がある。今その二三をあげて見ると、

(1) 忠及び孝に關する教材は、尋一より引續いて、「忠義」「孝行」等の題目のもとに殆ど毎卷あらはれて來てゐる。これは國民道德の中心として重んずべきものであるから當然であるが、尋六に至つては、之を「忠義」と「孝行」とに別つことなく、「忠孝」といふ題目のもとに兩者を一體として取扱つてゐる。尋六に至つて始めて國民道德としての「忠義」「孝行」

が、「忠孝一本」の根柢にまでふれ得てゐるのである。之を單に「忠義」と「孝行」とをまとめたものと見ず、國民道德の特質にふれさせようとする深みのある教材と見ねばならぬ。

「祖先と家」なる教材も亦さうである。これは、單に「私の家」「祖先を尊べ」「孝行」「兄弟」等の教材を総合的にまとめたといふだけのものではなくて、我が國社會組織の根本たる家の觀念を樹立し、國民としての自覺をもたしめ國民道德のよつて來るところを明にしようとの深い意味をもつところの教材である。

尋六の教材には、特に訓辭・説明を主とするものが多いことに注意せねばならぬ。「皇大神宮」「國運の發展」「國交」「忠君愛國」「祖先と家」「良心」「憲法」「國民の務」「男子の務と女子の務」「教育」「教育に關する勅語」などの教材はみなそれである。此の點は、尋五以下の修身教材と全くその面目を異にする大なる特質で、これは尋六の修身が、著しく思想的なものになつてゐるといふことを示してゐる。これによつて尋五までの斷片的な道德的指導を知的體系的にまとめようとする意味と道德的知見の開発に大に力を注がうとするの意味と、認識的自覺をもたしめようとの意味など、色々の意味を後見することが出来るのであるが、

實際の取扱に於ては、所謂主知主義修身の弊に陥ることなく、之に大に情意的要素を加へるの注意が必要である。

尋六の教材は、小學校修身教育としての重要な國民道德を悉く網羅してゐる。尋六が義務教育の完成であるとの意味が此の點によくあらはれてゐる。善良なる國家社會の一員としては、「自律的精神」と「共同的精神」との兩面を具備することが絶対に必要であるが、此の點に關しては、「自立自營」によつて自律を教へ、「公益」「共同」「慈善」等に於て共同を教へることになつてゐる。又、國家社會は創造的努力的にして意氣盛なる人間を要求するのであるが、此の點に關しては、「工夫」「進取の氣象」「沈勇」「勤勉」などの教材を備へて居る。又、現代社會の唯物主義・個人主義・功利主義的なる惡弊を除くために國家社會は精神的・情愛的な人間を要求するのであるが、その爲には、「清廉」「良心」「師弟」等の教材を採用してゐる。その他國民道德の中心としての忠孝、家の觀念、國家觀念等の教養の爲に、多くの國家的教材を用ひてゐることは已に述べた通りである。

尋六の修身教材に、現在生活の指導と見るべきものが殆どなく、すべてが將來生活の指導

と見られることは、これ亦尋六修身教材の大きな特徴である。これは尋六が義務教育の完成の學年であり、兒童をして愈々實社會に乗出さしめようとする時期の教育であるといふ意味に於て、むしろ當然であらう。勿論、現在生活を全然無視してゐるのではないが、將來生活の指導といふことにより重きをおいてゐるのである。例へば「男子の務と女子の務」といふ教材は、兒童現在の家庭生活或は學校生活に於て、男子は男子らしい務を完うし、女子は女子らしい務を完うせよとの意味を全然もたないわけではあるまいけれども、その主とするところは將來社會に出て家庭的にして同時に社會的、同時に國家的なる國民的生活をする際に於ける男子の任務と女子の任務とを教へようとするものである。又、「師弟」の課は「現在生活に於て師をうやまへ」といふことを教へるの意味を全然含まないわけではあるまいが、その主とするところは、師弟の情愛のこまやかであるべきことを感得せしめ、今後學校を卒業して幾年へたつとも師の恩を忘れず師の志をつがねばならぬ。上級學校に行つて新なる師に就いた場合にも師の教をよく守らねばならぬ、といふことを教へようとするにあるのである。學年の最後に當つて教育に關する勸語を教へることになつてゐることは、今までの道德的

教育の總まとめであり、それを此の御聖旨に歸結せしめようとするものであると同時に、今後一生を通じて渝るべからざる御聖旨奉戴の生活の根柢を深からしめようとするものである。此の教材が茲にあることは、義務教育完成期としての尋六の學年の特質を最もよくあらはしたものであるといへる。

二 尋六教材の横觀的研究

修身科と他教科との關係は密接不離でなければならぬ。眞の修身教育は、單獨なる修身科の指導のみで到底之を完うすることは出来ない。教育即道德教育、道德教育即教育、訓練即修身、修身即訓練、といふ意味に於て、どの教科にも修身教育がなければならず、どの修身にも他教科に於ける教育の背景が常に存せねばならないのである。しかし、ここでは、特に尋六の修身と關係の深い尋六の各科、各教材について、その連絡關係を吟味して見よう。

修身	科、教、材
一 皇大神宮	(國史) 「天照大神」一尋五
二 國運の發展	(讀) 「明治天皇御製」(國史) 「明治天皇」「大正天皇」(地) 「日本の總説」
三 國運の發展(つゞき)	(讀) 「新聞」(國史) 「明治天皇」「大正天皇」「今上天皇の即位」「國民の覺悟」(地) 「日本の總説」
四 國交	(讀) 「國旗」
五 忠君愛國	(讀) 「勝安房と西郷隆盛」 國史の各課
六 忠孝	(讀) 「ウェリントンと少年」 國史の各課
七 祖先と家	
八 沈勇	
九 進取の氣象	(讀) 「間宮林藏」
十 工夫	(讀) 「畫師の苦心」「人と火」「トマス・エヂソン」「電氣の世の中」
十一 自立自營	

十二 公益	(讀) 「青の洞門」「トマス・エヂソン」「商業」
十三 共同	(讀) 「小さなねぢ」
十四 慈善	(讀) 「鐵眼の一切經」
十五 清廉	(讀) 「孔明」「自治の精神」
十六 良心	(讀) 「孔子」
十七 憲法	(讀) 「裁判」「法律」
十八 國民の務	
十九 國民の務(つゞき)	(讀) 「自治の精神」
二十 國民の務(つゞき)	(讀) 「自治の精神」
二十一 男子の務と女子の務	
二十二 勤勉	
二十三 師弟	(讀) 「孔子」「松坂の一夜」「舊師に呈す」

- 二十四 教育
- 二十五 教育に關する勅語
- 二十六 教育に關する勅語
- 二十七 教育に關する勅語

(讀) 「リンカーンの苦學」

右の表によつて見ると、直接に修身教材と連絡するものは比較的少いやうである。けれども、尋六の修身教育は修身書の教材のみによつてなされるものではない。むしろ、各科の各教材が悉く修身の意味を以て指導されねばならぬ。かういふ立場からいふと、國史の全教材は、それを通して我が國體精神を明瞭にし國民たるの志操を養ふものであり、地理の全教材は以て愛國心を養ひ我が國運發展の情況を審にせしめるものである。

文藝教育論でははれるやうに、道德教育は廣く人性を養ふものでなければならぬから、直接の勤善懲惡や道德律の説明でなくても、以て修身教育と見做すべきものが澤山あり、徹底的にいへば、すべての教科のすべての教材による教育はみな修身教育である。特に國語に

於ける次の教材の如きは、修身教育的色彩が極めて強い。

(讀) 方 教 材)	(修 身 的 教 育 意 味)
(卷十一) 二 孔子	孔子の偉大なる人格、正義、中庸、好學、修養、等
五 のぶ子さんの家	整頓
六 裁判	司法の一般知識と遵法の方法
九 植 林	産業への關心、勤勉
一〇 手 紙	友情
一一 畫師の苦心	藝術的良心
一三 ふ か	親の情、親の恩
一四 北海道	富源の開発、土に親しむ心
一五 人と火	文明の進歩、人類の發展
一六 無言の行	不言實行

- (卷十二)
- 一七 松坂の一夜
 - 一九 我は海の子
 - 二〇 遠泳
 - 二二 リンカーンの苦學
 - 二三 南米より
 - 二四 孔明
 - 二五 自治の精神
 - 二六 ウェリントンと少年
 - 二八 鐵眼の一切經
 - 一 明治天皇御製
 - 二 出雲大社
 - 三 チャールズスターウイ

- 秩序、忍耐、日本精神
- 海國精神
- 忍耐、努力
- 立志、熱心、勉學、勤勉努力
- 海外發展、進取
- 知己、至誠、忠
- 公民の務、公正、共同、忠實
- 自信、節義、孝、
- 大慈悲、堅忍不拔
- 天皇の御聖德
- 我が國體
- 好學

- 四 新聞
- 六 商業
- 八 ヨーロッパの旅
- 九 月光の曲
- 一一 小さなねぢ
- 一三 國旗
- 一四 リヤ王物語
- 一七 間宮林藏
- 一八 法律
- 一九 釋迦
- 二一 青の洞門
- 二二 トマス・エヂソ

- 社會
- 商業道德
- 戰爭の慘禍
- 同情
- 自己の自覺、社會的協同
- 日本精神、國家
- 親子の情
- 進取、勇氣、忍耐
- 法治思想、遵法
- 人生、宗教、信仰
- 公益、堅忍不拔
- 工夫、公益

二三	電氣の世の中
二四	舊師に呈す
二六	勝安房と西郷隆盛
二七	我が國民性の長所短所

文明の進歩
師弟、謝恩
知己、愛國、度量、勇氣
日本精神、國民の自覺奮勵

讀方教材に於ける右の如き道德教育的意味を忘れてゐるやうでは到底尋六の修身教育は出來ない。修身教育は、ひとり修身書の教材による修身時間の指導ばかりではないのである。

第四章 尋六兒童生活の研究

一 小さい大人

尋六あたりの兒童は「小さい大人」だといはれる位、その心意は均整的な發達を遂げてゐる。衝動力の最も旺盛にはたらく尋三、四の時代から、理知と衝動性との矛盾に充ちた尋五の時代を過ぎて尋六の時代に入ると、相當に發達した理知はよく衝動力を統整して落ちついた、思慮深い意志生活の状態を示すやうになる。それがさらに高一、二以上の青春期に入ると、青春の血の溢れるままに、感傷や耽溺や空想や悲憤慷慨や、兎角激越な感情や異常な愛着に支配されてその行動は常軌を逸し奇矯に走り易いが、尋六あたりでは、知情意の發達が比較的圓滿で、その作用が調和的である。

尤も、此の點は、男女によつて多少の相違がある。概していへば男兒の方はまだ子供らしいところが多いが女兒の方は頗る大人びたところが多い。

二 道德的知情意の發達

尋六の兒童にあつては、その道德的知識は、最早日常生活に於ける事の是非善惡を識別するには大した不足もない程に發達してゐる。道德律の認識も、之を實際の場合に適用して道德的判斷を下す力も、日常生活に關しては殆どまづ一人前である。他人の行爲に對する道德的批判力も相當程度に發達してゐる。

尋六の兒童に於ては、所謂世故人情にも一通りは通じて來る。殊に女兒にあつては、人間らしい情愛や義理感によくふれることが出来る。従つて所謂「察し」がよい。「察し」のよいといふことは、他人の心持をよく理解出來るといふことで、知的要素よりも遙に情的要素の方が多し。此の察しの點では、男兒は女兒よりも發達がおくれてゐる。

善を好み惡を憎むといふやうな道德的感情に於ては、男兒も女兒も變はなく同じやうに相當發達してゐるが、男兒の方は正義感に強く、女兒は情に流れ易い。この點など大人と殆ど

同様の傾向を示してゐる。

意志に於て、尋五以下と著しく異なる點は、何事にも相當思慮深くなつて來ることと耐忍力が増して來ることとである。又、目的意識もはつきりとして來て計畫的な生活行爲が非常に多くなつて來る。

かく、尋六の兒童は、道德的の知情意が殆ど大人に近いやうによく發達はしてゐるが、しかし、その社會的生活に於ける風俗・習慣・業務等に關して、例へば服裝・行儀・作法・労働等を大人と同様に要求されることが少いから、子供はどこまでも子供らしい。すべてに於て社會から子供扱ひにされてゐるだけ、兒童自身も子供らしい氣分で生活してゐるので、知識内容や感情内容や意志の欲望内容等に於ては大人とは大きな違ひがある。經濟生活や性的生活に關しては全く大人とは別の世界に住み、その知情意の發達も極めて低い。

三 國家的生活の發展

尋六兒童の國家的生活は、忠君愛國の情に於ては、最早普通の大人とかはりはない程にまで進んでゐるといつても差支あるまい。むしろ大人のやうに私情私欲に絡まされることが少いだけ、その感情は純粹である。只、國家の認識に於て理論的に深い根柢にふれることは出來てゐないし、又、忠君愛國の念を具體的に實現するの機會を與へられることが少いのであるから、子供の忠君愛國はいはば抽象的である。

國家に對する一般の關心は男兒と女兒とによつて非常な相違がある。抽象的にもせよ、男兒は尋常五、六年に至ると、國家に對する關心が急激に高まつて來るのに對して、女兒は尋四時代よりもむしろ、漸次に低下して來るの傾向を示す。これは女兒が男兒に比して忠君愛國の情に乏しいことを示すわけではあるまいが、その平常の生活に於て、男兒が國家といふやうな大きな問題を意識に上せることを成長と共に次第に増して行くのに對して女兒が却つてその反對の傾向を示してゐるのは事實である。

次に示すものは、私が或學校に於て實地に調査した、兒童の「國家意識」の發達狀況の數的結果である。

國家意識の學年別男女別發達

右の中國家生活意識數	生活意識總數	兒童	
		男	女
7	1292	男	尋一
10	868	女	尋一
52	1421	男	尋二
11	1208	女	尋二
19	696	男	尋三
15	978	女	尋三
33	967	男	尋四
33	1013	女	尋四
99	1405	男	尋五
11	1561	女	尋五
66	1032	男	尋六
7	573	女	尋六

(註) 右の調査については少しく註を入れる必要がある。私のやつた調査は各學年兒童に對して日常の生活にあらはれる知情的的的各方面の生活意識を兒童の各自の反省によつて自ら捉へさせたもので、表に示す生活意識總數といふ中には、家庭生活意識や社會生活意識や學問生活意識などの知情意各方面をすべて含んでゐる。その總數に大小の差のあるのは、調査人員の多少と調査回数とによつて生じたもので、それ以外には何らの意味はない。注目すべきは、各學年男女に於ける「生活意識總數」と「國家生活意識數」との比率である。

右の表によつて、此の比率が如何に増減してゐるかゞ自ら明らかでそこに兒童生活に於ける國家的關心の發達を概観することが出来るであらう。

尙、次項「家庭生活」の説明中にも同様の形式の調査表を掲げておくが、その見方はすべて右に準すべきものである。

男兒も女兒も、同じ修身教科書によつて同じ教材を學んでゐる。しかも、その生活意識にあらはれる國家的關心の大小にかくの如き差違のあることは注目に値する。少くも、女兒の生活環境は尋五、六時代に於て、家庭への關心深い生活を餘儀なくせしめる爲に此のやうな結果を生ずるのであらうが、又女兒が本來大局に目を向けることが出来ないといふ特性をも示してゐるものと考へられる。

政治に關する關心も、尋六あたりの男兒にあつてはかなり深いものがあるが、女兒は一向無頓着である。これも一般社會環境の然らしめるところであらうが、又、本來女兒にはかうした方面の興味が乏しいといふことも考へられる。

四 家庭的生活の狀況

家庭生活に對する兒童の關心は一般に男兒よりも女兒に於て大である。男兒は國家や、社會やすべて外部のことに眼をつけるが、女兒は家庭といふ内部のことに眼を着けるのであつて、その生活の重要問題は、家族との關係や衣食住などに關することが多いのである。これは、修身に於ける實踐指導上の參考に資すべきことである。

家庭生活への關心の各學年男女別の増減情況を、私の調査の結果によつて表解すれば次の如くである。

家庭意識の學年別男女別發達

生活意識總數	兒童	
	男	女
851	1297	268
523	1421	1208
552	696	978
651	967	1013
185	1405	1561
470	1032	573
406		
558		
486		
645		
316		
188		

右の表によつて明なる如く、女兒は男兒に比して家庭生活に關心をもつことが尋五までは各學年とも斷然多い。只、尋六に至つては、男兒も女兒も殆ど相似た比率を示してゐるが、これは尋六の兒童が男女とも上級學校への入學に最大の關心を有たしめられてゐる爲で、特殊の現象であると推定すべきである。(事實、此の調査は中等學校入學志望者が大部分を占める都市の學校に於て行つたものである)

一般に、下學年では家庭への關心の深さを示してゐるが、これは兒童が未だ家庭の生活か

ら脱し得ない爲である。故に學年の進むに従つて、男兒は次第に家庭への關心を減じて行くのに對し女兒にあつては家庭への關心を増大して行く。尋六の女兒が入學受験準備といふ特別の關心の世界を有たないと假定したならば、恐らく尋五以上にその關心の急激なる増加を示すものであらうと思はれる。

家庭に於ける尋六の女兒は、最早殆ど主婦の代理をも務め得る位に發達した多くの部面を見せるであらうし、又、實際各家庭でもそれを要求してゐる。尋六の修身としては特に此の方面に注意することを忘れてはならない。これに反して尋六の男兒は大にその趣を異にしてゐると推察出来るし、修身教育の實際もここに考へるところがなければならぬ。

五 社會的生活及學校學級生活

尋六兒童の社會生活は、尋四尋五時代と急激なる變化を見せる何物もない。しかし、與へられたる社會事象に對して興味をもち、且つ之に接觸することは次第に増して來るのであり

特にその社會事象に對する理解力批判力などはかなり目ざましい發達をとげつつあるの時機である。

學校生活に於ける尋六兒童の位置は、かなり特殊なものである。此の點から、その生活及び教育について考へると、

イ 學校に於ける最上級生である。しかして兒童自ら此の自覺のもとに生活する。

ロ 最上級生であるから、事實上、全校兒童の模範となるべきことを要求せられ、又、自治會・通學團などの首脳部として兒童社會の責任ある位置におかれてゐる。

ハ それらに對する尋六兒童の自覺は、對校生活に於て特に彼らをして自重せしめ大人らしくさせる。

ニ 上級學校への入學の受験準備といふことで、彼らの學校生活の一般意識が非常に大きな牽制を受けてゐる。尋六になつたといふ自覺の起る四月の始めから、彼らの生活態度は一般に緊張し、持續的・計畫的・努力的傾向を帯んで來る。

ホ 尋六は自律的生活態度を養ふの好機である。これは、彼らの自覺を基調として考へら

れることである。それと同時に、學校といふ大きな團體に對する共同・責任・愛情などの心を養ふの好機である。
などへの着眼が特に大切である。

第五章 模式的指導過程の研究

一 家庭生活教材の指導過程

第七課 祖先と家

1 目的

家及び祖先に関する日本的意識を養ひ、現在及び將來に於ける家の生活の根柢深き實踐を指導する。

2 教材観

イ 本教材は單なる家庭生活の實踐指導ではない。日本といふ國家社會組織の基礎たる家の觀念を深め、祖先を敬し家を重んじ、之を日々の生活に實現することによつて日本の社會組織の根本を一層鞏固ならしめようとするところに大きな眼目がある。

ロ 本教材は、説明的訓辭ばかりで例話がない。従つて本教材の取扱は、知的觀念的に流

れ易いがこれは注意すべきことである。説明によつて理解させると同時に、その中に十分情的要素がこもり且つ實踐意志にふれるやうにせねばならぬ。

ハ 兒童各自の家に於ける具體的な家と祖先の學習をさせるやうにすれば、理解と同時に情も深まり實踐にも即した指導が出来る。本教材取扱の方針としてはここを視ふべきである。

3 指導計畫

第一 家庭生活に於ける孝行・友愛等の實踐指導と獎勵(入學以來繼續せる平素の生活訓練)

第二 特に機會を捉へての家と祖先に關する指導(孟蘭盆、彼岸、個人の祖先の命日等に於ける生活訓練)

第三 祖先と家についての觀念及び感情の指導(修身指導第一時)

第四 私が家に於ける自己の位置の自覺と實踐の指導(修身指導第二時)

第五 家の生活に關する自覺に基いての實踐の獎勵(修身指導後に於ける繼續的生活訓練)

4 本課指導の實際

第一時

(一) 本時の着眼

兒童各自の家の具體的理解を中心として家及び祖先に對する一般觀念及び感情を養ひ、我が祖先に感謝し、我が家を重んじ、之を尊び之を愛し之を發展せしめるの志念を養ふ。

(二) 準備

兒童各自をして、我が家の祖先を調査し、系圖を作り、祖先の業績と我が家の發展等を研究させる。

(三) 指導過程

(1) 我が家の系圖について調査したところを發表させる。

(2) 我が祖先の業績及び家の發展についての研究を發表させる。

(3) 祖先の恩と我が家の生活、祖先への感謝

イ 教科書の讀解(前半)

□ 教科書の玩味——我が家の實際への具體化

a 我が家で父母はどうしてゐられるか

b 我が家は誰が起し誰が維持して来たか

c 祖先の心

d 我々は祖先に對して何と感ずるか、どうせねばならぬか

(4) 日本の社會組織と家

イ 日本は家族主義の制度によつて社會が組織されてゐる。

ロ 西洋諸國は個人主義の制度で、社會の組織がちがふ。

ハ 日本では家を祖先から繼承する、その爲に家督相續が行はれる。家は無形の存在であるが、祖先より傳へられたものであるから之を最も重んずる。家を重んずることは祖先を尊ぶ所以である。

ニ 日本の家庭は祖先の家を守り之を發展させ之を子孫に傳へるところの家族の共同生活である。

第二時

(1) 本時の着眼

我が家に於ける自分の位置を自覺させ、現在及び將來の生活に於ける實踐を指導する。

(2) 指導過程

(1) 前時の要點の復演

イ 日本の社會に於ける我が家庭はどういふ意味のものであるか

ロ 我が家は誰の賜であるか

ハ 祖先の心はどうであるか

ニ 我々は祖先に對してどうせねばならぬか

(2) 我が家に於ける自己の位置の自覺

イ 自分の家には今どんな家族があるか

ロ その家族の一員として自分はどんな立場にあるか

- (3) 教科書の讀解(後半)
- (4) 教科書の玩味——家を重んずる道の實踐
 - イ どうしたら祖先の恩に報いることが出来るか
 - ロ 家の名譽を高め家の繁榮をはかるにはどうせねばならぬか
 - ハ 自分一人の善行悪行はどういふことになるか
 - ニ 現在生活として自分はどうせねばならぬか
 - ホ 將來、大人になつてから自分はどうせねばならぬか

二 社會生活教材の指導過程

第十四課 慈 善

1 目的

他人に同情し慈善事業に力をつくし以て社會に奉仕せんとの念を深め共同社會的生活態度を養ふ。

2 教材觀

1 本課の例話は石井十次の偉大なる人格とその博愛精神の實踐とである。深くその人格的根柢にふれさせて博愛慈善の心を養はねばならぬ。

2 本課の指導は慈善の心を養ふと同時に現在及び將來の實踐を指導するものであるから現在に於ける體験的訓練を重んぜねばならぬ。

3 尋六としては特に社會の實際にふれさせなければならぬ。現在の社會とはなれて抽象的に慈善を教へることは出来ない。此の故に社會組織・社會事象等に着眼しての取扱の方法を特に考慮せねばならぬ。

3 指導計畫

- 第一 平素に於ける同情心及び博愛慈善の指導（本教材前の生活訓練）
 - 第二 年末同情週間の指導（修身指導第一時）
 - 第三 例話の取扱（修身指導第二時）
 - 第四 慈善の精神の現代的實踐（修身指導第三時）
 - 第五 慈善の現代的實踐の實行（本教材後の生活訓練）
- 4 指導の實際

第一時

(一) 本時の着眼

現代の社會行事としての年末同情週間の趣意を理解させ、且つ不幸なる人々への同情心を深め、その社會行事への参加の意志を指導する。

(二) 準備

不幸なる人々に對する新聞記事の蒐集
年末同情週間に關する資料の蒐集

(指導過程)

(1) 年末同情週間

同情週間の趣意を明にし、之に参加の意志動機を起させる。

(2) 不幸なる人々——之によつて意志動機を強める。

イ 不幸なる人々の新聞記事

ロ 兒童の直接見聞せる人々

(3) 同情週間の實踐——例へば、義捐金を集めて贈るといふ如き

イ 實踐の方法

ロ 實踐の決意

第二時

(一) 本時の着眼

例話によつて石井十次の人格にふれしめると同時に、慈善の精神を深く養ひ、同情週間實踐の行動を激勵する。

(二) 指導過程

(1) 同情週間實踐情況

兒童をして、各自の實踐の情況を報告させる。

(2) 例話の取扱

イ 教科書の讀解

ロ 例話の玩味

a 茶臼原孤兒院の狀況

- b 十次の經歷
- c 十次の慈善心
- d 十次の人格と事業
- (3) 同情週間の實踐の反省と再思慮
 - イ 自分の慈善心の厚薄
 - ロ 今後の實踐の方法

第三時

(一) 本時の着眼

現代社會に於ける實踐方法の指導を行ふ。

(二) 指導過程

(1) 現代の社會機構の概要

イ 現代の社會は自由競争を立前としてゐる。

ロ その爲に病氣その他の原因による不幸なる人々の發生を餘儀なくされる。
ハ 國家及び社會に於て、防貧・救貧等の社會事業を盛に行つて之が救濟につくしてゐる。

(2) 現代に於ける社會事業の概要

イ 公設市場・共同宿泊所 等の防貧事業
ロ 職業紹介所・労働保健

ハ 救療所、孤兒院・救世軍

等の救貧事業

ニ 方面事業・同情週間

ホ 現代に於ける種々の社會事業團體

(3) 社會事業の發展

イ 社會事業は一般社會人の慈善心による参加援助を必要とする。

ロ 社會事業の爲に盡粹する中心人物を必要とする。

(4) 現代に於ける慈善の實踐

イ 個人としての慈善救濟

ロ 社會事業團體への参加と援助

(5) 實踐上の諸問題

イ 乞食に對してどうしたらよいか

ロ 必ず社會事業團體に参加せねばならぬか

等の問題

(4) 同情週間の實踐の經過報告

三 國家生活教材の指導過程

第十八課 國民の務（兵役の義務）

一 目的

國防の必要を知らしめ、忠君愛國の念を深め、國民の務として兵役に服し義勇公に奉ずるの志念を養ふ。

二 教材觀

1 平和は理想であり、我が日本民族は又極めて平和を愛好する。世界平和の爲に貢献することは我が民族の大理想でもあり我が帝國の使命でもある。けれども今日の如き國際狀勢にあつては戦争はむしろ不可避である。如何なることによつて何時戦争が勃發せぬとも限らぬ。

三 指導計畫

第一 平素に於ける忠君愛國精神の涵養

第二 現時の國際情勢と戦争の不可避、日本の使命、光榮ある我が國史（本課の修身指導第一時）

第三 兵役の義務（本課の指導第二時）

2 一朝事ある際に當つては國民は擧つて國家の防衛に當り、世界平和の確立の爲の戦に勝たねばならぬ。

3 國民が自ら進んで兵役の義務に服さねばならぬことは勿論であるが、戦争といふものをよく理解し、我が帝國の大使命を自覺しての上で義勇奉公の誠をつくさねばならぬ。本課に於てはその根柢を深く養ふことが眼目である。

4 女兒は直接兵役の義務に服するものではない。けれども右の精神をよく理解し、常に舉國一致の精神を發揮せねばならぬ。その意味に於て本課の指導は男兒に於けると同様に女兒に於ても必要であり且つ大切である。

四 指導の實際

第一時

1 本時の着眼

戦争といふものについて、現下の国際情勢より我が帝國の使命といふ立場から充分なる理解を得させる。

2 準備

入退營の際に送迎をなさしめ體験的指導を行ふ。

3 指導過程

(一) 入退營兵送迎の體験

(二) 兵役の義務の重要性

(1) 國防の必要——平和の基礎條件としての國防充實

(2) 國防は國民の務

(三) 戦争の不可避

1 現下の国際情勢

2 日本の使命

3 止むを得ざる戦争

4 過去に於ける正義の戦

(四) 光榮ある我が國史

1 我が國威は一度も傷けられたことがない

2 國史を汚さぬ覺悟

第二時

1 本時の着眼

兵役の義務内容について教へ國民たる覺悟を固めさせる。

2 指導過程

- (一) 前時の要點の復演
 - 1 止むを得ざる戦争と國防の必要
 - 2 光榮ある我が國史と我々の義務
- (二) 兵役の義務の内容
 - 1 國民皆兵
 - 2 徵兵検査
 - 3 入退營と出征
- (三) 國民の覺悟
 - 1 軍籍にある者の覺悟
 - 2 その他すべての國民の覺悟
 - 3 舉國一致と女子の覺悟

第六章 各學期の指導要領

一 各學期の指導方針

1 第一學期の指導方針

第一學期の教材を見ると、第一課「皇大神宮」第二、三課「國運の發展」以下第五課「忠孝」に至るまで、國家的教材の連続である。しかして、第七課「祖先と家」は直接には國家的教材ではないが我が國家社會の組織の根本としての家族制度について指導しようとするものであり、第八課「沈勇」はその例話内容に於て忠君愛國精神の横溢したものであり、第九課「進取の氣象」もやはり、國家意識にふれるところが多大であり、第十課「工夫」は國家獎勵の意味を多分に含むと見てよい。要するに第一學期の教材は、直接或は間接な國家意識の高潮である。

次に、第一學期の各教材を見ると、その徳目的要素からいつて何れも既出のものである。

只、「國交」と「沈勇」だけが新出といへばはれるが、「沈勇」は「ものごとにあはてるな」と「勇氣」と二つを合せたものに過ぎなく、此の點「忠孝」が、「忠義」「孝行」の二つを合せたものとその形に於て相似てゐる。

かく、全然新出の徳目はないのであるが、然らば、尋六第一學期の教材は、單なる既習事項の反復であるかといふにさうではない。反復と同時に之を深め、その徹底を期するところに眼目がある。しかも、その深め方は著しく思想的である。即ち、固より、感情や意志の指導を輕視するのではないが、道德的知識を深めその見識を高めようとするところに眼目をおくのである。此のことは現代の如き世相の複雑なる時代・思想の混亂せる時代の教育としては極めて必要なことで義務教育の完成期として、教科書が此の如き態度をとつてゐることは誠に當を得てゐるのである。

思想的に徳目の指導を深めようとする關係上、勢、その教材内容は例話よりも訓辭に傾いてゐる。第一學期の教材で、所謂例話教材は、僅に「沈勇」「進取の氣象」「工夫」の三課だけである。

以上のやうな教材の特質及び義務教育完了期の教育として、尋六第一學期の修身指導は次の如き方針による必要がある。

- イ 國家生活の意識を高めること
- ロ 國家及び國家道德に關する道德的認識を、思想的に深めること
- ハ 自律的態度で、なるべく自ら教科書を読んで修身學習を行ふの學習態度を養ふこと
- ニ 例話による感激はなくとも、思想の理解共鳴によるより深い感激にひたらせること
- ホ 深い道德的認識を根柢としての日々の具體的實踐に意を用ひて教材を取扱ふこと

2 第二學期の指導方針

第二學期の教材は、社會教材を主としてゐるが、個人の自覺に關するものや國家教材なども含んでゐる。新出題材としては、第十五課「清廉」第十六課「良心」第十七課「憲法」第十八課、第十九課、第二十課の「國民の務」がある。これらの新出教材の中、「清廉」や「良心」は、その内容程度の高いものであつて、低學年兒童には理解し難いものであり、第十七

課「憲法」以下の國家教材は所謂法制的なもので公民教育としての色彩が最も顯著である。本學期指導の方針としては、

イ 共同社會的生活精神を基調とし、之に徹底せしめるやうに、社會教材を取扱ふこと
ロ 子供の道德的自覺を深め、それによつて自ら修養に勵むやうな生活態度の教養に力を
用ふること

ハ 公民教育的指導には特に力を用ひ、法制的生活觀念の深化に努力すべきこと——かくの如き法制教材は、法治國家の國民の義務教育としては、頗る大切なものであるからである。

ニ 今學期は前學期に比して例話教材が多いが、之に訓辭的要素を加へて適當な「深さ」の教育に努力すること

3 第三學期の指導方針

本學期に於ける教材の中にも特色を含むものが多い。「男子の務と女子の務」の如きは、明

に尋六なればこそその教材である。「勤勉」も亦、將來の職業生活の指導を主な目標としたものであり、「教育」は、義務教育の意味を理解せしめると同時に、將來永久の自己教育を暗示するものである。「教育に關する勅語」は義務教育六箇年の總括・反省であると同時に御聖旨の趣を明にし、將來に於ける國民の自己修養のよるべきところを教へようとするものである。教材としては、以上の如く、種々多數なものの集積であるが、それらに一貫した特質を捉へるならば、「將來生活への準備」といふ色彩が極めて強いといふことがはつきりいへる。

で、本學期指導の方針としては

イ 將來生活への心得をさとすといふ意味で教材指導の徹底に努力すること

ロ 教へ子を世に送り出す指導教師としては、將來生活の心得としてまだ此の外にいつておきたいことが山程あるであらう。それらの點は、必ずしも教科書の教材内容のみに拘束されず、むしろ教材を一層深め具體化する意味に於て多くの敷衍補説をなすべきである。所謂「處世の道」に關したり「經濟生活」に關したり、性教育に關したり、上級學校生徒としての生活に關したり、職業生活の心得に關したり、敷衍補説すべきことは殆

ど盡さないであらう。

ハ 敷衍補説すべきことが右の如く極めて多いのであるから第三學期に於ては、修身時間の不足を感じる恐れもある。かかる場合は、適宜、放課後などの時間を利用していふべきことを盡すやうにしたいものである。

ニ 卒業間際になつて一度に多くの教訓を與へても、子供は到底それを消化し盡せない。だから、少くとも、第三學期の始から、常に少しづつその教訓を徹底させて行くやうになすべきである。

ホ 卒業期の生活は、子供に於ても極めて意味深い體驗である。謝恩會と「師弟」とを結びつけ、各科の總復習を「教育」と結びつけ、修身の總復習と「教育に関する勸語」とを結びつけ、男女の共同動作による卒業記念事業と「男子の務と女子の務」とを結びつけ、記念植樹を「將來の修養發展」の教訓と結びつけるといふやうに、修身としての指導と實際の生活體驗との結合に注意し、日々の實踐の根柢を道徳的意味の深いものたらしめるやうな點に特別の考慮を拂ふべきである。

二 各學期の指導要目

1 第一學期の指導要目

教材	指導の要點	主なる生活訓練
第一課 皇大神宮	1 皇祖の尊崇 2 我が國體の尊嚴	1 修學旅行に於ける皇大神宮の参拜 2 その参拜の作法
第二・三課 國運の發展	1 我が國運の發展 2 我らの覺悟	1 祖先、先輩への感謝 2 國民としての實力修養への努力

第十一課 自立自營	教材	指導の要點	主なる生活訓練
2	1	1 フランクリンの自立自營 2 社會的共同と自律	1 自律的生活態度 2 儉約と勉強と忍耐努力

2 第二學期の指導要目

第九課 進取の氣象	第十課 工夫	指導の要點	主なる生活訓練
1 高田屋嘉兵衛の進取 2 國民の進取と國運の發展	1 井上での工夫と忍耐 2 努力工夫と國家社會の福利増進	1 スポーツによる進取的態度の養成 2 不斷の發展的努力	1 手工制作に於ける工夫 2 忍耐努力の學習

第四課 國交	第五課 忠君愛國	第六課 忠孝	第七課 祖先と家	第八課 沈勇
1 國際平和の精神 2 國際親善の方法 3 國民外交	1 忠君愛國の國民的遺風 2 我らの覺悟	1 楠木正行の忠孝兩全 2 忠孝一致の我が國民道德	1 我が國社會組織の基礎と 2 我が家族制度 3 我が祖先と我らの覺悟	1 佐久間大尉の沈勇 2 人事ヲ盡シテ天命ヲ待ツ
1 外國人に對する親切 2 國際關係の研究	1 國防献金 2 質實剛健の氣風	1 皇室の尊崇 2 孝の實踐	1 自己の修養への精進 2 家業の手傳 3 祖先の墓參・祭祀	1 災害防止デー 2 最善努力と敏捷なる動作

第十二課 公益	第十三課 共同	第十四課 慈善	第十五課 清廉	第十六課 良心
2 1 フランクリンの公益の 実践	2 1 五庄屋の共同 社会生活に於ける共同の 種々相	2 1 石井十次の人格と慈善の 現代社会に於ける慈善の 実践	2 1 乃木大將の清廉 經濟生活と清廉	2 1 良心の發達と良心の命令 林子平の良心的行動
2 1 學級學校への奉仕 苗代の害蟲驅除など	2 1 共同動作による學級事業 の完成 共同制作	2 1 同情週間 慈善事業への喜捨	2 1 簡素なる生活 所持品の検査	2 1 反省と告白 明朗なる生活

3 第三學期の指導要目

第十七課 憲法	第十八課 國民の務(一)	第十九課 國民の務(二)	第二十課 國民の務(三)
4 3 2 1 法治國と憲法 我が國憲法發布の由來 憲法の内容 遵法の精神	3 2 1 日本の理想使命と國際情 勢 止むを得ざる戦争 兵役の義務とその内容	2 1 納税の必要 納税の心得	2 1 立憲政治 選挙及び議員の心得
2 1 學級に於ける立法 規則を重んずる生活	2 1 入退營の送迎 國防献金	2 1 家の納税及申告 公有物國有物の尊重	2 1 選挙場の見學 自治會

第二十七課 教育に關する勅語(三)	第二十六課 教育に關する勅語(二)	第二十五課 教育に關する勅語(一)
<p>1 第三段の御聖旨</p> <p>2 我が國民道德の普遍性</p>	<p>1 第二段の御聖旨</p> <p>2 國民道德の中心</p>	<p>1 第一段の御聖旨</p> <p>2 我が國體の精華</p>
<p>21 善と信する所に従つて行へ 如何なる場合と雖家と父母 と國と天皇を忘れず生活 せよ</p>	<p>1 孝に徹して忠の民たれ</p> <p>2 徳器成就を念とせよ</p>	<p>21 思想を健實にもて 皇室に對して不敬などのふ るまひなきこと</p>

第二十四課 教育	第二十三課 師弟	第二十二課 勤勉	第二十一課 男子の務と 女子の務	教材	指導の要點	主なる補說事項
<p>1 義務教育と國家の要求</p> <p>2 六ヶ年の反省</p>	<p>1 忠敬の人格</p> <p>2 師弟の情</p>	<p>1 伊能忠敬の勤勉</p> <p>2 勤勉は人の道、社會の爲</p>	<p>1 國民として行ふべき道</p> <p>2 男女の特性による差別</p>			
<p>1 日常不斷の自己修養</p> <p>2 研究的態度の生活</p>	<p>1 舊師恩師への文通を怠る な 重大事は師に相談せよ</p> <p>2</p>	<p>1 上級學校に行く者はよく 勉強すること 職業見習は特に辛抱強く</p> <p>2</p>	<p>1 家事家業の手傳 男も家庭に關心を深くせ よ</p> <p>2 經濟に深く注意せよ</p> <p>3</p>			

三 標準考査問題

1 第一學期の考査問題

- 一 皇大神官は何故尊いか
- 二 どうして我が國運は發展したか
- 三 外國人に對する時の注意
- 四 平時の忠君愛國と非常時の忠君愛國
- 五 忠と孝とはどうして一致するか
- 六 何故家を重んじなければならぬか
- 七 「人事ヲツクシテ天命ヲマツ」とはどういふことか
- 八 どういふ工夫をすることが最も國家社會のために役立つか

- 九 進取の氣象とはどういふ心か
- 十 今後の日本を發展させる爲に我々はどうせねばならぬか

2 第二學期の考査問題

- 一 共同して却つて悪いことは何か
- 二 今の世の中ではどんな方法で慈善が出来るか
- 三 清廉とはどういふことか
- 四 良心にそむいた時の心持はどうか
- 五 法律には何故従はねばならぬか
- 六 戦争はどういふ場合に起るか
- 七 納税について心得ふべき主なることから
- 八 選舉權はどういふ人に與へられてゐるか
- 九 自立自營は誰の爲にするのか

書全方へ教

—(46)—

身修の六尋

錢五十四價定



1929

發行所

東京・麹町・下六番町

厚生閣

電話九段三三二一八番
振替東京五九六〇〇番

昭和十年九月十日印刷
昭和十年九月十四日發行

著者 岩瀬六郎

東京市麹町區下六番町四十八

發行者 岡本正一

東京市麹町區土手三番町二九

印刷者 谷口熊之助

東京市麹町區土手三番町二九

印刷所 谷口印刷所

各期要領の要領

(十) どんなことをしたら公益になるか

3 第三學期の考查問題

- 一 男子の務と女子の務とは何處がちがふか
- 二 女子が職業を習ふことはよいか悪いか
- 三 勤勉な學生とはどんな學生のことか
- 四 師の恩に報いるにはどうすればよいか
- 五 小學校を卒業してすぐに職業につく人はどうして學問するか
- 六 我が國體の精華はどこにあるか
- 七 國民道德の中心となる道德は何か
- 八 何故教育勅語を賜はつたか
- 九 教育に関する勅語の中に「子孫臣民」と仰せられてあるのは誰のことか
- 十 教育に関する勅語を奉體して有難いと思ふ點はどこか

厚生閣版教育書選

☆教へ方全書

(出版總目錄無代進呈)

全教 方書	1 尋	一	の	修	身	東京成蹊 學園調導	野瀨寬 顯著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	2 尋	一	の	讀	方	東京女高 師調導	徳田 進著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	3 尋	一	の	算	術(上卷)	奈良女高 師調導	池内房 吉著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	4 尋	一	の	算	術(下卷)	奈良女高 師調導	池内房 吉著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	5 尋	一	の	綴	方	東京竹町 校調導	富原義 徳著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	6 尋	一	の	體	操	東京女高 師調導	寺谷朝 藏著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	7 尋	一	の	唱	歌	東京城東 校調導	小出浩 平著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	8 尋	一	の	圖	畫	廣島高師 調導	大竹拙 三著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	9 尋	一	の	手	工	奈良女高 師教授	横井曹 一著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	10 尋	一	の	學	級經營	東京女高 師調導	村田英 吉著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	11 尋	二	の	修	身	東京成蹊 學園調導	野瀨寬 顯著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料

全教 方書	12 尋	二	の	讀	方	東京女高 師調導	徳田 進著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	13 尋	二	の	算	術	東京兒童 の村調導	牧澤伊 平著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	14 尋	二	の	綴	方	東京竹町 校調導	富原義 徳著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	15 尋	二	の	體	操	東京高師 調導	齋藤薫 雄著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	16 尋	二	の	唱	歌	東京城東 校調導	小出浩 平著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	17 尋	二	の	圖	畫	廣島高師 調導	大竹拙 三著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	18 尋	二	の	手	工	奈良女高 師教授	横井曹 一著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	19 尋	二	の	學	級經營	東京女高 師調導	村田英 吉著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	20 尋	三	の	修	身	奈良女高 師教授	小林 巖著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	21 尋	三	の	讀	方	東京高師 調導	佐藤末 吉著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	22 尋	三	の	算	術	東京女高 師調導	山内俊 次著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	23 尋	三	の	綴	方	東京高師 調導	田中豊 太郎著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	24 尋	三	の	體	操	東京高師 調導	齋藤薫 雄著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料
全教 方書	25 尋	三	の	唱	歌	東京三河 校調導	坊田壽 眞著	新四六 判布裝	入	價〇・四五	送 〇六料

全書	53	尋	六	の	學	級	經	營	東京高師 の村主事	野村芳兵衛著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	52	尋	六	の	地	理	方	術	東京高師 調導	柴田來著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	51	尋	六	の	國	史	科	方	東京高師 調導	確井正丸著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	50	尋	六	の	理	方	術	東京高師 調導	栗山重著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	49	尋	六	の	綴	方	術	東京高師 調導	淺黄俊次郎著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	48	尋	六	の	算	方	術	東京高師 調導	關根忠著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	47	尋	六	の	讀	方	術	東京高師 調導	佐藤徳市著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	46	尋	六	の	修	身	營	東京高師 調導	岩瀬六郎著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	45	尋	五	の	學	級	經	營	東京高師 の村主事	野村芳兵衛著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	44	尋	五	の	地	理	方	術	東京高師 調導	柴田來著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	43	尋	五	の	國	史	科	方	東京高師 調導	確井正丸著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	42	尋	五	の	理	方	術	東京高師 調導	高村廣吉著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	41	尋	五	の	綴	方	術	東京高師 調導	淺黄俊次郎著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	40	尋	五	の	算	方	術	東京高師 調導	關根忠著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	

全書	39	尋	五	の	讀	方	術	東京高師 調導	佐藤徳市著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	38	尋	五	の	修	身	營	東京高師 調導	岩瀬六郎著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	37	尋	四	の	學	級	經	營	東京高師 調導	三本重長著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	36	尋	四	の	手	工	營	東京高師 調導	大竹拙三著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	35	尋	四	の	圖	畫	工	營	東京高師 調導	横井曹一著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	34	尋	四	の	唱	歌	工	營	東京高師 調導	坊田壽眞著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	33	尋	四	の	理	科	方	術	東京高師 調導	高村廣吉著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	32	尋	四	の	綴	方	術	東京高師 調導	田中豊太郎著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	31	尋	四	の	算	方	術	東京高師 調導	山内俊次著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	30	尋	四	の	讀	方	術	東京高師 調導	佐藤末吉著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	29	尋	四	の	修	身	營	東京高師 調導	小林巖著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	28	尋	三	の	學	級	經	營	東京高師 調導	三本重長著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料
全書	27	尋	三	の	手	工	營	東京高師 調導	大竹拙三著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料	
全書	26	尋	三	の	圖	畫	工	營	東京高師 調導	横井曹一著	新四六判布裝入	價〇・四五	送〇六料

☆修身教育

生活訓練と道德教育	兒童の村 主 野村芳兵衛著	四六判洋布裝 入	價二・八〇	送 一四料	
現代修身教育指針	東京高師 前指導 千葉春雄編	美菊 裝判	價二・三〇	送 一四料	
惱みの修身	木村文助著	四六判布裝 入	價二・六〇	送 一四料	
生活行の修身教育(學年別)	齋藤榮治著	菊判美裝 入	各二・八〇	各送 一四料	
勞働創造の修身教育	河野通賴著	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一四料	
生活内省と修身教育	河野通賴著	四六判洋布裝 入	價二・五〇	送 一八料	
全人格的生活と修身教授の諸相	河野通賴著	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一八料	
修身教育問答	東京高師 調 川島次郎著	四六判布裝 入	價二・〇〇	送 一四料	
共同體社會を 基調とする	尋 野村芳兵衛著	菊判洋布裝 入	價三・四〇	送 一八料	
教材 尋 一修身例話と指導法	野村芳兵衛 河野通賴 共著	四六判洋布裝 入	價二・〇〇	送 一四料	
人格主義の倫理と修身	河野通賴著	四六判洋布裝 入	價二・〇〇	送 一四料	
最近 修身教育實踐の進歩	厚生閣編輯部編	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一四料	
修身・國 史・國語	辨證的教育の實踐	松本光亮著	菊判洋布裝 入	價二・九〇	送 一四料

☆國語教育

國語教育學	東京高師 講 丸山林平著	菊判背革裝 入	價四・二〇	送 一四料
辨證法的國語學習	齋藤榮治著	四六判洋布裝 入	價二・三〇	送 一四料
國語科要旨の批判と解説	東京高師 前指導 官川菊芳著	四六判洋布裝 入	價一・八〇	送 一四料
國語教育診斷	武藤 要著	四六判洋布裝 入	價二・八〇	送 一四料
國語の本質とその教育	廣島高師 調 佐藤徳市著	四六判布裝 入	價二・六〇	送 一四料
國語教材内觀の方法	齋藤榮治著	四六判洋布裝 入	價二・六〇	送 一四料
小學國語讀本の指導とその理論	東京高師 前指導 千葉春雄編	美菊 裝判	價〇・六〇	送 一四料
小學國語讀本の指導とその理論	東京高師 前指導 千葉春雄編	美菊 裝判	價〇・八〇	送 一四料
國語教育の修身的考察	河野通賴著	四六判布裝 入	價二・五〇	送 一四料
最近の文學・文章研究と國語教育	東京高師 前指導 千葉春雄編	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一四料
最近の心理學と國語教育の問題	東京高師 前指導 千葉春雄編	菊判洋布裝 入	價二・七〇	送 一四料
國語教育の科學的研究	東京高師 前指導 千葉春雄編	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一四料
國語教育の方法學的研究	東京高師 前指導 千葉春雄編	菊判洋布裝 入	價二・五〇	送 一四料

小學國語讀本朗讀法(卷一後期用)	東京文理 大教授	神保	格著	美菊	判裝	價〇・九〇	送 一〇料
小學國語讀本朗讀法(卷二前期用)	東京文理 大教授	神保	格著	美菊	判裝	價一・一〇	送 一〇料
小學國語讀本朗讀法(卷三後期用)	東京文理 大教授	神保	格著	美菊	判裝	價一・一〇	送 一〇料
小學國語讀本朗讀法(卷四前期用)	東京文理 大教授	神保	格著	美菊	判裝	價一・一〇	送 一〇料
小學國語讀本朗讀法(卷五前期用)	東京文理 大教授	神保	格著	美菊	判裝	價一・一〇	送 一〇料

☆綴方教育

綴り方指導系統案一覽表	東京高師 前調導	千葉春雄著	掛圖	用面	價〇・一五	送 〇二料
調べた綴り方とその実践	上田庄三郎著	富原義徳著	四六判布裝	入	價二・二〇	送 一四料
教室用綴り方	富原義徳著	木村文助著	四六判布裝	入	價二・九〇	送 一四料
村の綴り方	木村文助著	富原義徳著	四六判布裝	入	價二・三〇	送 一四料
土の綴り方	富原義徳著	佐々井秀緒著	四六判布裝	入	價二・六〇	送 一四料
新文話と綴り方教育	佐々井秀緒著	千葉春雄編	美菊	判裝	各〇・四〇	送 各〇・八料
綴り方のおけいこ(全六册)	東京高師 前調導	千葉春雄編	美菊	判裝	各〇・四〇	送 各〇・八料
綴り方教科の施設と經營	東京高師 前調導	千葉春雄編	美菊	判裝	價一・九〇	送 一四料
最近の文學と綴り方教育	志垣寛著		四六判美裝	入	價一・八〇	送 一四料

形義原理に立つ綴方教育の實際	古見一夫著	四六判布裝	入	價二・一〇	送 一四料	
生活させる綴り方指導	東京高師 前調導	千葉春雄著	四六判布裝	入	價二・六〇	送 一四料
低學年の綴り方	金子好忠著	四六判布裝	入	價二・〇〇	送 一四料	
生活開發の綴方教育	川口半平著	四六判洋布裝	入	價二・〇〇	送 一四料	
綴り方心理學	西山庸平著	菊判洋布裝	入	價二・八〇	送 一四料	
綴り方教育問答	東京高師 前調導	千葉春雄著	四六判布裝	入	價二・〇〇	送 一四料
實用的綴方教育	川村章著	四六判布裝	入	價二・八〇	送 一八料	
手紙日記と綴方教育	武藤要著	四六判布裝	入	價二・〇〇	送 一四料	
綴り方設計圖	奥村利一著	四六判布裝	入	價二・三〇	送 一四料	
本義綴り方教育	藤原信著	四六判洋布裝	入	價二・三〇	送 一四料	
科學的綴方教育の設營	佐々井秀緒著	菊判洋布裝	入	價二・〇〇	送 一四料	
子供の郷土研究と綴り方	峯地光重著	四六判美裝	入	價一・五〇	送 一四料	

☆兒童詩教育

批評と添削小學兒童の詩	百田宗治著	四六判美裝	入	價一・九〇	送 一四料
-------------	-------	-------	---	-------	----------

こども	の詩教育	佐々井秀緒著	四六判布装	入	價二・三〇	送	一四料
生活への	児童詩教育	稲村謙一著	四六判美装	入	價二・〇〇	送	一四料
日本	児童新詩集	吉田瑞穂著	美六判	装	價一・五〇	送	一四料
童謡	鑑賞の實際	奈良女高師調導 河野伊三郎著	四六判布装	入	價一・八〇	送	一四料
詩の指導と	綴方教育	久保田宵二著	四六判美装	入	價二・〇〇	送	一四料
☆話方教育							
話し方	指導の理論と實際	山口信量共著	四六判洋布装	入	價一・八〇	送	一四料
話し方・	聞き方の實際研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布装	入	價一・八〇	送	一四料
お話	あそびと小さい劇	長尾 豊著	四六判美装	入	價一・六〇	送	一四料
童話と	其味ひ方解説	長尾 豊著	四六判美装	入	價二・一〇	送	一四料
劇と	お話教育問答	長尾 豊著	四六判布装	入	價二・〇〇	送	一四料
歌と	お話の戯曲化の仕方集	長尾 豊著	四六判美装	入	價一・八〇	送	一四料
國語	讀本教材お話集(第一編)	長尾 豊著	四六判美装	入	各一・八〇	送	一四料
☆書方教育							

書方	教育問答	東京高師前調導 水戸部寅松著	四六判布装	入	價二・〇〇	送	一四料
☆算術教育							
現代	生活算術	三本重長譯著	四六判布装	入	價二・五〇	送	一四料
グラフ	化の算術教育	東京高師前調導 稻次静一著	菊判洋布装	入	價三・二〇	送	一四料
最近	算術教育實踐の進歩	厚生閣編輯部編	菊判洋布装	入	價二・五〇	送	一四料
算術	教育問答	東京高師前調導 稻次静一著	四六判布装	入	價二・九〇	送	一四料
實驗	算術の原理と實際	森 三郎著	菊判洋布装	入	價二・五〇	送	一四料
數學	教育の諸問題	村上 義著	四六判布装	入	價二・六〇	送	一四料
小學	算術の根本解義と指導(第一期一用)	東京高師前調導 稻次静一著	菊判洋布装	入	價二・三〇	送	一四料
☆國史教育							
國史	教育の新思潮と實際經營	海老澤匡著	菊判洋布装	入	價三・二〇	送	一四料
國史	教育の革新	文藝士前本一男編	美六判	装	價二・五〇	送	一四料
小學	國史教材と教授法(第五用)	西龜正夫著	菊判布装	入	價一・九〇	送	一四料
國史	教育問答	廣島高師調導 大久保馨著	四六判布装	入	價二・〇〇	送	一四料

最近 國史教育實踐の進歩 厚生閣編輯部編 菊判洋布裝 價二・五〇 送料
 小學校國史を 戲曲化する 兒童 劇 脚本 長尾 豊著 四六判美裝 入 價二・三〇 送料

☆地理教育

地理教育の新思潮と實際經營 海老澤匡著 菊判洋布裝 入 價三・四〇 送料
 地理 新教育 精義 廣島高師 前訓導 菊地勝之助著 菊判洋布裝 入 價三・四〇 送料
 郷土地理の調べ方と實例 西龜正夫著 四六判美裝 入 價一・八〇 送料
 滿洲國中心支那地理 西龜正夫著 菊判布裝 入 價三・四〇 送料
 改訂小學地理教材と教授法(尋五用) 西龜正夫著 菊判背布裝 入 價一・九〇 送料
 改訂小學地理教材と教授法(尋六用) 西龜正夫著 菊判背布裝 入 價二・〇〇 送料
 改訂小學地理教材と教授法(高一用) 西龜正夫著 菊判背布裝 入 價一・八〇 送料
 改訂小學地理教材と教授法(高二用) 西龜正夫著 菊判背布裝 入 價一・六〇 送料
 最近 地理教育實踐の進歩 厚生閣編輯部編 菊判洋布裝 入 價二・五〇 送料
 小學校地理を 戲曲化する 兒童 劇 脚本 長尾 豊著 四六判美裝 入 價二・八〇 送料
 地理 教育 問 答 東京女高 師訓導 齋藤英夫著 四六判布裝 入 價二・〇〇 送料

☆理科教育

小學校理科實驗指導細説 氏家勇記著 菊判洋布裝 入 價二・八〇 送料
 理科 教育 問 答 東京高師 訓導 堂 東 傳著 四六判洋布裝 入 價二・〇〇 送料
 小學校理科を 戲曲化する 兒童 劇 脚本 長尾 豊著 四六判美裝 入 價二・五〇 送料
 最近 理科教育實踐の進歩 厚生閣編輯部編 菊判洋布裝 入 價二・五〇 送料

☆音楽教育

新音楽教育の研究 北村久雄著 菊判洋布裝 入 價四・八〇 送料
 高學年音楽生活の指導 北村久雄著 菊判洋布裝 入 價三・二〇 送料
 正しい音楽生活の指導(特に中學年の研究) 北村久雄著 菊判洋布裝 入 價三・〇〇 送料
 國語として觀たる音楽 東京高師 前訓導 青柳善吾著 四六判洋布裝 入 價一・四〇 送料
 やさしい獨唱と輪唱曲集 坊田かずま著 菊判布裝 入 價一・二〇 送料
 音楽教育の實際問題 東京高師 前訓導 青柳善吾著 四六判布裝 入 價二・〇〇 送料
 心理化 唱歌 綜合教育 坊田壽眞著 菊判背布裝 入 價一・八〇 送料
 動作の やさしい唱歌(正續) 厚生閣編輯部編 菊判各 價一・〇〇 送料

唱歌あそびと小さい唱歌劇
長尾信曲著 菊美 判 價一・〇〇 送 一四料

唱歌教育問答
東京高師 前調導 青柳善吾著 菊美 判 價二・〇〇 送 一四料

☆舞踊教育

豊香教材としての
學校舞踏三十四講
小瀬峰洋著 菊美 判 價一・〇〇 送 一〇料

本體育舞踊の理論と實際
體育會 體操學校 赤間雅彦著 菊美 判 價一・五〇 送 一四料

幼稚園の舞踊
石井小浪著 菊美 判 價〇・八〇 送 〇八料

尋一の舞踊
石井小浪著 菊美 判 價〇・八〇 送 〇八料

尋二の舞踊
石井小浪著 菊美 判 價〇・八〇 送 〇八料

幼稚園のおゆづき
長尾豊著 菊美 判 價一・〇〇 送 〇八料

☆手工教育

霜田靜志 共著 菊美 判 價一・一〇 送 一四料

松岡正雄 共著 菊美 判 價一・一〇 送 一四料

武田忠雄著 菊美 判 價一・五〇 送 一四料

和歌山 師範教諭 畠山康親著 菊美 判 價二・九〇 送 一八料

東京女高 師範調導 山形寛著 菊美 判 價二・〇〇 送 一四料

手工指導書(全六册)
菊美 判 價一・一〇 送 一四料

小學校手工用器畫法
菊美 判 價一・五〇 送 一四料

手工科教授細案
菊美 判 價二・九〇 送 一八料

手工教育問答
菊美 判 價二・〇〇 送 一四料

☆圖畫教育

關衛著 菊美 判 價二・五〇 送 一四料

關衛著 菊美 判 價二・三〇 送 一四料

三森連象著 菊美 判 價二・六〇 送 一四料

日本美育會編 菊美 判 價各〇・六〇 送 一〇料

廣島高師 調導 大竹拙三著 菊美 判 價二・〇〇 送 一四料

☆體育遊戲

東京高師 前調導 齋藤薰雄著 菊美 判 價二・三〇 送 一四料

東京高師 前調導 齋藤薰雄 共著 菊美 判 價二・八〇 送 一四料

東京高師 前調導 齋藤薰雄著 菊美 判 價一・五〇 送 一四料

北村久雄著 菊美 判 價二・八〇 送 一四料

齋藤薰雄著 菊美 判 價二・〇〇 送 一四料

厚生閣編輯部編 菊美 判 價二・五〇 送 一四料

☆家事教育

學校體操實踐の進歩
菊美 判 價二・五〇 送 一四料

家事の實際知識 秋間保郎著 菊判背布裝入 價二・九〇 送料二八

家事教育問答 東京女高師高橋さき共著 四六判布裝入 價二・〇〇 送料二四

☆作法教育

現代國民作法實演 大日本作法普及會 山口和喜著 菊布 裝判 價一・五〇 送料二四

☆裁縫教育

裁縫指導細目 (尋四用・尋五用) 齊田コト著 菊判(尋四)〇・八〇 (尋六)一・〇〇 裝(尋五)〇・九〇

裁縫指導細目 (高一用) 齊田コト著 菊美 裝判 各一・〇〇 送料二〇

洋裁洋裝事典 婦人畫報前編部長 今田謹吾著 三六判洋布裝入 價一・五〇 送料〇八

裁縫手藝に關する色彩指導法 本間良助著 菊判布裝入 價三・〇〇 送料二四

裁縫教育問答 東京女高師前編部長 田原美榮著 四六判布裝入 價二・〇〇 送料二四

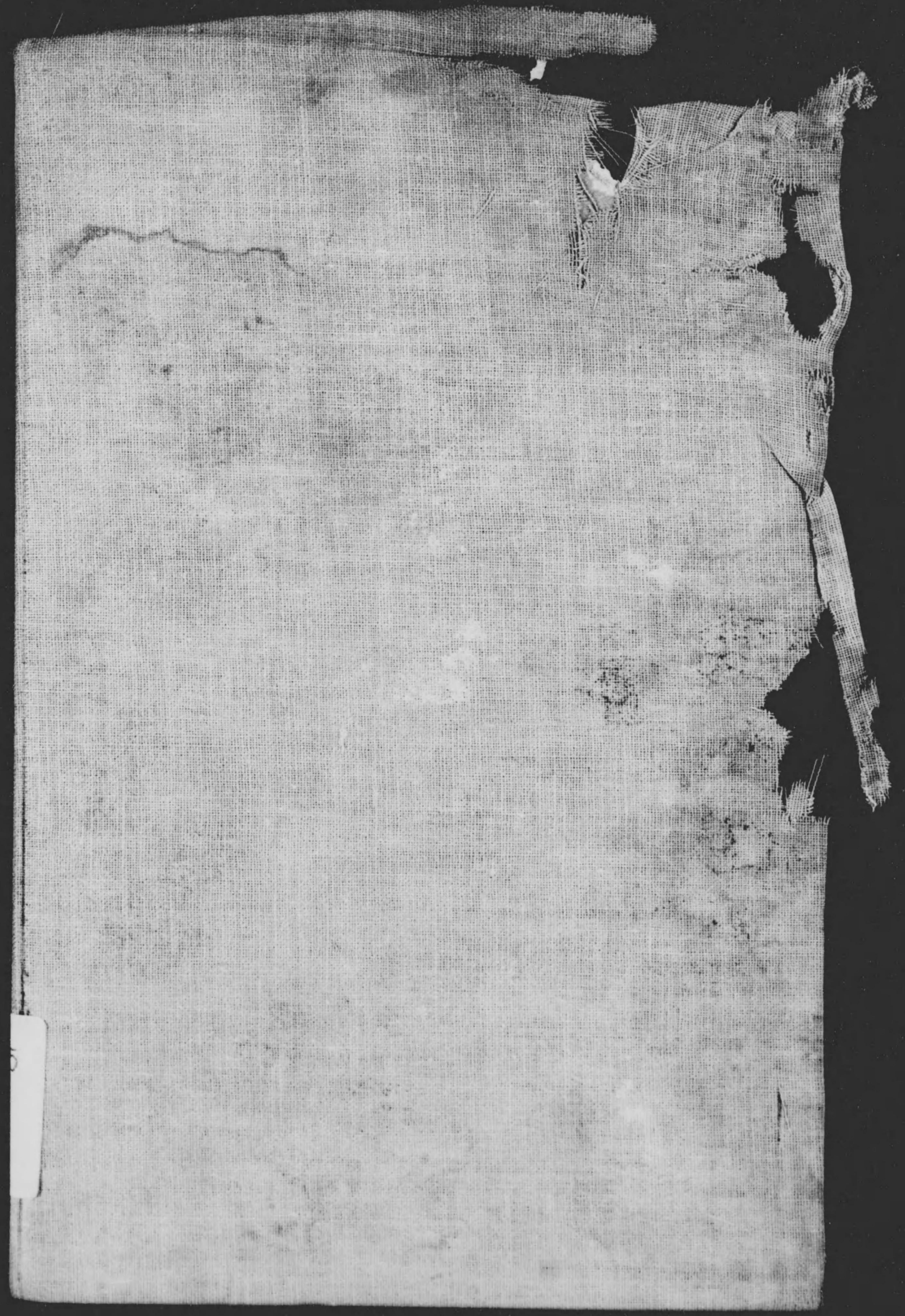
☆手藝教育

手藝指導細目 (尋常科用) 齊田コト著 菊美 裝判 高等〇・九〇 尋常〇・八〇 送料各一〇

創作的な手藝學習の指導 齊田コト著 四六判美裝入 價二・〇〇 送料二四

現代手藝教育最新資料と指導の實際 齊田コト著 四六判美裝入 價二・〇〇 送料二四





5